_

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしていた。 おいろうとする自分の心をひっぱたいて、できるだけ伸び伸びがろうとする かきのけても容易に火の燃え立って来ないような瞬間にはもかきのけても容易に火の燃え立って来ないような瞬間にはもかきのけても容易に火の燃え立って来ないような瞬間にはが来て雪にうずもれて行く一面の畑を見渡しながら、港りが来て雪にうずもれて行く一面の畑を見渡しながら、巻点をなりがでかが大きでは確かに ――すべての人の心の奥底にあるのと同様な ―― 火が燃えてはいたけれども、その火を燻らるのと同様な ―― 火が燃えてはいたけれども、その火を燻らるのと同様な ―― 火が燃えてはいたけれども、その火を燻らるのと同様な ―― 火が燃えてはいたけれども、その火を燻らるのと同様な ―― 火が燃えてはいたけれども、その火を燻らるのと同様な ―― 火が燃えてはいたけれども、その火を煙らるのにしようとしていた。ねじ曲がある。

ぐらにこの高原の畑地を目がけて吹きおろして来る風は、割さないものには、日がいち早く 蝕 まれるこの気味悪いさびしさで、昼の光は夜の闇に変わって行こうとしていた。午後に上から下へと一気に視線を落として行く時に感ずるような速上から下へと一気に視線を落として行く時に感ずるような速息はずんずん暮れて行くのだった。灰色からねずみ色に、寒い。原稿紙の手ざわりは氷のようだった。

い白い唖の群れの舞踏――それは見る人を涙ぐませる。 せいらい で、他のすべてのやつらは残らず唖だ。快活らしたであたる雪片だけがさらさらさらさらとささやかに音を立たであたる雪片だけがさらさらさらさらとささやかに音を立たであたる雪片だけがさらさらさらさらとささやかに音を立たながら、いた印象を見る人の目に与えながら、いたずら者ら横ざまに舞い飛ばした。雪片は暮れ残った光の迷子のように、合に粒の大きい軽やかな初冬の雪片をあおり立てあおり立て

そして君の事を思った。私はさびしさのあまり筆をとめて窓の外をながめてみた。

大きなりんご園の中に建ててあった。いう川の右岸にあった。その家は堤の下の一町歩ほどもあるろだった。私の借りた家は札幌の町はずれを流れる豊平川と私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでいるこ 1-

はことにはっきりと私の記憶に残っている。クをうるさそうにはずしたままにしていた、それが妙な事にたような少年だった。きたない中学校の制服の立て襟のホッきげんそうな、口の重い、癇で背たけが伸び切らないといっそこにある日の午後君は尋ねて来たのだった。君は少しふ

る人のように、ふろしき包みの中から乱暴に幾枚かの絵を引や水彩画を持ちこんで来ていた。君は自分自身を平気で虐げいたいと言い出した。君は片手ではかかえ切れないほど油絵君は座につくとぶっきらぼうに自分のかいた絵を見てもら

見つめた。明らさまに言うと、き抜いて私の前に置いた。そし きな若者だと思った。 そして君のほうには顔も向 そしてじっと探るように私の顔を その時私は君をいやに高慢ち けない

よんどころなくさし出された絵を取り上げて見た。

地っぱりな目つきをして、やはり私を見続けていた。 なった。で、そうした。 画面から目を放してもう一度君を見直さないでは 思議に力がこもっていてそれがすぐ私を襲ったからだ。 てはいないし幼稚な技巧ではあったけれども、 私は一目見て驚かずにはいられなかった。 その時、君は不安らしいそのくせ意 少し その中には不 いいられ の 修 練 私は なく ŧ

を感じながらも、 う一度明らさまに言うが、 したものでしょうね」とかなんとか。 「どうでしょう。それなんかはくだらない出来だけ 「くだらない出来がこれほどなら、 種の反感を覚えて、ちょっと皮肉でも言ってみたくなった。 そう君はいかにも自分の仕事を軽蔑するように言った。 ڹ かにも思いあがったような君の物腰には 私は一方で君の絵に喜ば 会心の作というのは しい驚き れども」 たい ŧ

勝って私に迫っていたからだ。 をのがれ しかし私は幸いにもとっさにそんな言葉で自分を穢すこと 君の絵がなんといっても たのだった。それは私の心が美しかったからではな 君自身に対する私の反感に打ち

におおうた霙。雲のすきまから午後の日がかすかに漏れて、 った。 ので、軽川あたりの泥炭地をざと残っている一枚がある。 君がその時持って来た絵の中で今でも私 荒涼と見渡す限りに連なった地平線の低い葦原を一軽川あたりの泥炭地を写したと覚しい晩秋の風景画 、あたりの泥炭地を写したと覚し それは八号の の心 風景にかか の底に れ まざま たも 面 だだ そ

> 気分が行き渡っていた。悒鬱――十六七の少年には哺めそうりか、その絵が与える全体の効果にもしっかりとまとまった そこには作者の鋭敏な色感が存分にうかがわれた。そればか る純白の色さえ他の色と練り合わされずに、そのままべとり うな手荒な筆触で、 が不器用に画布にたたきつけられて、そのままけし飛んだよ れが、草の中からたった二本ひょろひょろと生い伸びた白樺 となすり付けてあったりしたが、それでもじっと見ていると、 の白い樹 皮を力弱く照らしていた。 自然の中には決して存在しないと言われ 単色を含んで来た筆の

経

「たいへんいいじゃありませんか」

もない重い悒鬱を、

見る者はすぐ感ずる事ができた。

はおかなかった。 絵に対して素直になった私の心は、私にこう言わさないで

-2-

は所在なさに黙ったまま絵をながめつづけていた。 を等分に見くらべていたが、ふいと庭のほうへ顔をそむけて 冷笑うような冷ややかな表情をして、しばらくの間私と絵と すぐ次の瞬間に来ると、君はしかし私を疑うような、自分を い事はなかった。二人は気まずく黙りこくってし しまった。それは人をばかにした仕打ちとも思えば思われな それを聞 くと君は 心持ち顔を赤くした と私 ま は 思 つ うった。

い た。 言わさないじゃおかないぞといったような真剣さが現われて 出す気にはなれないでいた。しかし改めて君の顔を見ると、 ぐになった気分から、 突然また君の無愛想な声がした。 少しでもまに合わせを言おうものなら軽蔑してやるぞ ちょっと自 分の意見をずばずばと言い 私は今までの妙にちぐは

「そいつはどこん所が悪いんです」

れていた。 やろうと私もとうとうほんとうに腰をすえてかかるようにさ といったような鋭さが見えた。よし、それじゃ存分に言って

な事、モティヴが耽情的過ぎる事などをならべたに違いない。しては技巧が非常にあぶなっかしい事、自然の見方が不親切 に今はおおかた忘れてしまっている。 その時私が口に任せてどんな生意気を言ったかは幸いな事 しかしとにかく悪口と

とも皮肉な痙攣とも思いなされた。 に始めて笑いらしいものを漏らした。 聞いていた。私が言いたい事だけをあけすけに言ってしまう 君は黙ったまままじまじと目を光らせながら、 君はしばらく黙りつづけていたが、やがて口のすみだけ それがまた普通の微笑 私の言う事を

すわりつづけた。 それから二人はまた二十分ほど黙ったままで向かい合って

の言葉はまた僕を驚かせた。まるで別な、初な、 いものをかいて来ます」 「じゃまた持って来ますから見てください。今度はもっとい その沈黙のあとで、 君が腰を浮かせながら言ったこれ だけ

素直な子供

です」

結局君をいろいろに邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。 声一つが君と私とを堅く結びつけてしまったのだった。 でもいったような無邪気な明るい声だったから。 不思議なものは人の心の働きだ。 この声一つだった。 この

一ええ」 それじゃもう始まっているんじゃないか」

「なぜ帰らないんです」

たんです。・・・・それから少し都合もあって」 「どうしても落第点しか取れない学科があるんでいやになっ

「君は絵をやる気なんですか」

「やれるでしょうか」

ような顔つきになった。 そう言った時、君はまた前と同様な強情らしい、 人に迫る

ろしかった。私は黙っていた。 年の思い入ったような態度を見るにつけ、 全体をどうして大胆にも決定的に言い切る事ができよう。 ない私が、五六枚の絵を見ただけで、その少年の未来の運命 私もそれに対してなんと答えようもなかった。 私にはすべてが恐 専門· 家で

てください。……絵が好きなんだけれども、下手だからだめ を僕は夢にまで見ます。その絵を作り上げて送りますから見 内のそばに硫黄を掘り出している所があるんです。 「僕はそのうち郷里に――郷里は岩内です――帰ります。 その景色

さびしい調子でこう言った。そして私の目の前に取り出した 行ってしまった。 何枚かの作品をめちゃくちゃにふろしきに包みこんで帰って 私の答えないのを見て、君は自分をたしなめるように堅い

れは快く空の晴れ渡った小春びよりの一日だった。私の庭下駄ラメィとした男実だにカ真褙て累々と日にさらされていた。 そ 赤々とした果実だけが真裸で累々と日にさらされていた。 わになっていた。ある木などは葉がすっかり散り尽くして、 んご畑の中を歩きまわった。 君を木戸の所まで送り出してから、私はひとりで手広いり ゜りんごの 枝は熟した果実でたわ

控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになって、君のの岐路に立って疑い迷っていた時だった。私は冬を目の前にりと漂っていた。ちょうどそのころは、私も生活のある一つれた。豊満のさびしさというようなものが空気の中にしんみに踏まれた落ち葉はかわいた音をたてて微塵に押しひしゃが

してしまったのだ。 とにかく君は妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消事と自分の事とをまぜこぜに考えた。

私の手もとには届いて来なかった。 手がかりは得られなかった。硫黄採掘場の風景画もとうとういないか、その人を知らないかなぞと尋ねてみたが、さらにう人などに邂うと、私はよくその港にこういう名前の青年はきりでぱったり消息が途絶えてしまった。岩内から来たといその後君からは一度か二度問い合わせか何かの手紙が来た

る一人だった。 襲われる。 このやむを得ない人間 どこか殉情的で人なつっこい私の心は、 とでも、花とでも、 う不思議な、 吸しながら、 たどうしが、 に君の事を思い出すと、私は人生の旅路のさびしさを味わ こうして二年三年と月日がたった。そしてどうかした拍子 度とにかく顔を合わせて、 君も多くの人の中で私にそんな心持ちを起こさせ でも、塵とでもだ。さびしい、恐ろしい 未来永劫またと邂逅わない……それはいったん別れたが最後、同じこの地球 の運命をしみじみと感じて深 恐ろしい事だ。人とは言うま 孤独に親しみやすいくせに ある程度まで心を触 同じこの地球の上に どうかした拍子に、 な 慢鬱に Ā れ とい 犬 呼 つ

しかも浅はかな私ら人間は猿と同様に物忘れする。四年五

聞きながら、 夜の寂寞の中に、入って後、草も木 こそは全くひとりで歩かねばならぬと決心の臍を堅めた。 に足もとからまくし上がるのを手をこまねいてじっとながめ らぬかの二筋道に迷いぬいた-道にはおぼろげながら気味悪い不幸の みして、そろそろと芽ぐみかけていた。 ら離れて教会とも縁を切った。それまでやっていた仕 越えて、 年という歳月は君の記憶を私の心からきれいにぬぐい取って ている事もあった。 分の力量に疑いを感じ通しながら原稿紙に臨んだ。 意志と取り組む覚悟をしなければならなかった。 儀なくされた。それは文学者としての生活だった。 は捨て身になって、 ねばならなかった。 していた。 た。妻も迎えた。三人の子の父ともなった。 こしてい しまおうとしていたのだ。 たこの道に踏み込んだ以上は、 い都会生活が始まった。 んだん失望を感じ始めた。新しい生活の芽が周囲 言っても、 この短からぬ時間 潜 在 そこで私の上にもいろいろな出来事がわき上がっ 私は始終私自身の力を信じていいのか疑わね 草も木も寝入って後、 私は足 意識の 私は神がかりのように夢中になって筆を運ばし 万年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを 心の中に起こったそんな危機の中で、 見も知らぬ新しい世界に乗り出す事を余 私の周囲には亡霊のような魂がひし 奥底に隠れてしまおうとしていたのだ。 そして、 君はだんだん私 できてもできなくても人 目にあまる不幸がつぎつぎ を去って、 ひとり目ざめてしん 雲がおお 私の目の前の生活の の意識 私には物足ら 長い間の信仰 いかかろうと の拒絶をも の 私は始終自 私は今度 **閾**きい 人々が寝 事に を踏み ばな ゕ 私

そういう時のエクスタシーをだれが味わい得よう。

は感激の涙に漂っていた。

芸術におぼれたものでなくって、

私の目

の心が痛ましく裂け乱れて、

純一な気持ちがどこのすみにも

しかし私

りと感じた事もあった。そんな時気がついてみると、

紙の中に生まれ出ようと苦しみあせっているのをはっき

て、

うる深刻な自然の肖像画だった。 それは明らかにほんとうの芸術家のみが見うる、 それが明らかに北海道の風景である事を知った。のみならず、 そして描き

れにも山と樹木ばかりが描かれてあった。

ぎっていたかもしれない。 その時の私の顔には微笑の代わりに苦い嫉妬の色が濃くみな ほほえんだ。白状するが、それがもし小説か戯曲であったら、 っぱいに描きながら下くちびるをかみしめた。そして思わず 「やっつけたな!」咄嗟に私は少年のままの君の面影を心い

しい 画学紙にすり切れた筆で乱雑にこう走り書きがしてあった。 その晩に なって一封の手紙が君から届いて来た。 や は り厚

「北海道ハ秋モ晩クナリマシタ。

野原ハ、

毎日ノヨウニツ

捨てて椅子から立ち上がり、部屋の中を歩き回りながら、自ものに向かって敵意を含んだ君のあの面影だった。私は筆を と冷刻な批評とが互いに衷に戦って、 その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私にはなんにも残さ 見つけられない時のさびしさはまたなんと喩えようもない。 分を信じていいのか悪いのかを決しかねて、 たように私の念頭に浮かぶのは君のあの時の面影だった。 れてしまっているのだ。こんな瞬間に限っていつでもきま またとあろうか。そういう時に彼は明らかに生命から見放さ が文学者である事を疑うほど、世に空虚なたよりないもの れない。私は自分の文学者である事を疑ってしまう。文学者 思わず知らずすべての たくましい意志 自 が

つ

中から、

くれ。 の苦しみはおれ一人だけでたくさんだ」 どうか正直な勤勉な凡人として一生を終わってくれ。もうこ 自分を誇大して取り返しのつかない死出の旅をしないでいて 「あの少年はどうなったろう。道を踏み迷わないでいてくれ。 もし彼に独自の道を切り開いて行く天稟がないのなら、

分につぶやくように言った。

ぼしょぼと降っている午後に一封の小包が私の手もとに届 うものを知ってからちょうど十年目だ ところが 女中がそれを持って来た時、 去年の十月――と言えば、 私は干し魚が送られたと思 Ш ― のある日 岸の家 で偶然君とい 雨の しょ

ラ好キデス。ラナク時ヲ無為ニ送ッテイマス。デスガ私ハ私ノ故郷ダカ青年ノ多クハ小サクサカシクオサマッテイルモノカ、ツマトイウモノニツイテ思イヲメグラス人ハ少ナイヨウデス。私ノ町ノ知的素養ノイクブンナリトモアル青年デモ、自分

ノガハズカシイノデス。私ハナントナクコンナツマラヌモノヲあなたニ見テモラウ取ルベキトコロノアルモノガアルデショウカ。イロイロナモノガ私ノ心ヲオドラセマス。私ノスケッチニ

ハ絵ノ具ヲドッシリ付ケテ、

山ガ地上カラ空へモレアガ

モドウモ物体感ニトボシク思ワレマス。山ハ私ガ実際ニ感ジルヨリモアマリ平面ノヨウデス。樹木スケッチデハ私ノ感ジガドウモ出ナイデコマリマス。私ノッテイルヨウニカイテミタイモノダト思ッテイマス。私ノッテイルヨウニカイテミタイモノダト思ッテイマス。私ノ

ス。イツカオヒマガアッタラ御教示ヲ願イマス。たニコンナ無遠リョヲカケテタイヘンスマナク思ッテイマナニシロマダカクダケノ腕ガナイヨウデス。オ忙シイあな私ハイロイロナ構図デ頭ガイッパイニナッテイルノデスガ、ナイノデ、コンナモノデ腹イセヲシテイルノデス。色ヲツケテミタラヨカロウト考エテイマスガ、時間ト金ガ

十月末」

た言葉だ。
こう思ったままを書きなぐった手紙がどれほど私を動かして言葉だ。
こう思ったまするかなり鋭い能力が発達している。私は君の手紙を読んであるスケッチ帳と、君の文字との間には一分のすきもなから空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれあがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれるがる……それはすばらしい自然への肉迫を表がら空にもれるがる。

一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんでいる」

く涙ぐんでしまったのだ。により美しいものに感じられたのだ。そう感ずるとなんとなんはそう思ったのだ。そう思うとこの地球というものが急

には、もう上野駅から青森への直行列車に乗っている私自身準備にかかった。その日から一週間とたたない十一月の五日を見ると、ぜひ君に会ってみたくなって、一徹にすぐ旅行のと思っていたところだった。しかし君のスケッチ帳と手紙と躊躇するうちに寒くなりかけたので、もういっそやめようかまのころ私は北海道行きを計画していたが、雑用に紛れて

と言って。 来られるなら来ないか、なるべくならお目にかかりたいからて君に手紙を出しておいた。農場からはそう遠くもないから、札幌での用事を済まして農場に行く前に、私は岩内にあてを見いだした。

いたのだった。 去の回想やら当面の期待やらをつぎつぎに脳裏に浮かばしてりがちな筆を休ませる間に、今まで書き連ねて来たような過向かって呻吟しながら心待ちに君を待つのだった。そして渋雪が降りだした。私は窓の所へ机を持って行って、原稿紙に書場に着いた日には君は見えなかった。その翌日は朝から

_

ランプを持って来たついでに、夜食の膳を運ぼうかと尋ねたタやみはだんだん深まって行った。事務所をあずかる男が、

今さらながら一種の圧迫をさえ感ずるのだった。りで来て見ると、物でも人でも大きくゆったりしているのにと消えて行くのを、視覚のはずれに感じて、都会から久しぶように原稿紙に向かった。大きな男の姿が部屋からのっそりら、わざとそのままにしておいてもらって、またかじりつくが、私はひょっとすると君が来はしないかという心づかいか

法りがちな筆がいくらもはかどらないうちに、夕やみはどいかのやられた。 はもう迫っていた。私は窓ガラスに白もめんのカーテンを引きつけながら、のたうち回ってうめき叫ぶその物すごい気配された。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたく感じられた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたく感じられた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたく感じられた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたく感じられた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたく感じられた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたけはに、変した。 がいでしたがいてもなんとないがかやられた。 ともに荒れ始めていた。底力のこもったがい空気が、音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがってえだしたように、夜とともに荒れ始めていた。底力のこもった。 はもう迫っていた。私は窓ガラスに白もめんのカーテンを引がかた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたとないた。自然の帰題をせき止めるために人間が苦心して創り上がられた。

ざと部屋の中にすくんでいる私の想像に浮かべられた。だめはずみを取っておいて、どっと一気に天に向かって、謀反では上歯を下くちびるにあてがって思いきり長く息を吹いた。は上歯を下くちびるにあてがって思いきり長く息を吹いた。たと私は二つに折った背中を思わず立て直した。同時に自然を、音と運動との区別はない)天地に起こった。さあ始まっ突然、ど、ど、ど、ど:・という音が――運動が(そういう場

はもうとうに埋まってしまったに違いないから。私は吹雪のだ。待ったところがもう君は来やしない。停車場からの雪道 底にひたりながら、 物さびしくそう思って、また机の上に目

を落とした。

こうして私にとって情けないもどかしい時間が三十分も過ぎ 時々起こりはしたが、大切な文字は生まれ出てくれなかった。 たころだったろう。 筆はますます渋るばかりだった。 農場の男がまたのそりと部屋にはい 軽い陣痛のようなも って のは

姿は、 男にふさわしく肥って大きな内儀さんも、普通な背たけの男がまだ靴も脱がずに突っ立っていた。農場の男も、 がら、 巨人だ。頭からすっぽりと頭巾のついた黒っぽい外套を着て、 までがおびえた目つきをして内儀さんのひざの上に丸まりな 雪まみれになって、口から白い息をむらむらと吐き出すその か見えないほどその客という男は大きかった。言葉どおりの 大囲炉裏の切られた台所に出て見ると、そこの土間に、 へかけつけた。 る。やはり来てくれたのだ。 来て客来を知らせたのは。私の喜びを君は想像する事が その男をうろんらしく見詰めていた。 実際人間という感じを起こさせないほどだった。子供 事務室の障子をあけて、二畳敷きほども 私はすぐに立って事務室のほう 普通な背たけにし その ある でき

つのるのを覚えた。 君ではなかったなと思うと僕は期待に裏切られた失望のた いらいらしかけていた神経のもどかしい感じがさらに

「さ、ま、ずっとごっちにお上がりなすって」

て、 、囲炉裏のそばの煎餅蒲団を裏返した。
農場の男は僕の客だというのでできるだけ丁寧にこうい つ

経の所有者らしい姿はどこにあるのだろう。

しこをした厚衣を二枚重ね着して、

どっしりと落ち付いた君

地をつぶしてさ

ように、 塊的とよりこの男を照らさなかった。男がぐっしょり湿ったマッス 兵隊の古長靴を脱ぐのを待って、 、天井の高いだだっ広い台所にともされた五分心のランプその男はちょっと頭で挨拶して囲炉裏の座にはいって来た ' 今はもう、この男によって、 ちょろちょろと燃える木節の囲炉裏火とは、 いやな気分にさせられないようにと心ひそかに願い 私は黙ったまま案 むだな時間がつぶされない 黒い大きな 内に立っ

座にすわって、 うにその男を見た。男はぶきっちょうに、 部屋にはいって二人が座についてから、 丁寧に頭を下げた。 それでも四角に下 私は始め てほ んと

ながら。

「しばらく」

八畳の座敷に余るような鏽を帯びた太い声がした。

゙あなたはどなたですか」

まっかな額をなでた。 大きな男はちょっときまりが悪そうに汗でしとどになった

「木本です」

「え、木本君!!」

理解しようとする、 こにのぞき出している針葉の一本をも見のがさずに、愛撫し はどこにあるのだろう。また落葉松の幹の表皮からあすここらない、どこか病質にさえ見えた悒鬱な少年時代の君の面影 と見直さなけ これが君なのか。 ればならなかった。疳のために スケッチ帳で想像されるような鋭敏な神 私は驚きながら改めてその男をしげしげ 背たけ いも伸び

た肩の上に、 のすわり形は、私より五寸も高く見えた。筋肉で盛り上がっ 正しくはめ込まれた、牡牛のように太い首に、

する男は、深い猜疑の目で恋人の心を見守らずにはいられま 完全な若者だろう。」私は心の中でこう感嘆した。恋人を紹介 気のない君の容貌をも暖かく見せていた。「なんという無類な りと乗っていた。 からわいて出る寛大な微笑の影が、自然に漂っていて、 締まっていたが、 やや長めな赤銅色の君の顔は、 君の与えるすばらしい男らしい印象はそんな事まで私に 輪郭の正しい目鼻立ちの隈々には、心の中 筋肉質な君の顔は、 健康そのもののようにしっか どこからどこまで引き 脂肪

「吹雪いてひどかったろう」思わせた。

会ったからすぐ知れました。あれは親身な人だっけ」けんど道がわかんねえで困ってると、しあわせよく水 「なんの。……温くって温くって汗がはあえらく出ました。 す番に

幾度も押しぬぐった。 ぬぐいを腰から抜いて湯げが立たんばかりに汗になった顔を というのは実際このへんで珍しく心持ちのいい男だ。 君の素直な心はすぐ人の心に触れると見える。 あの水車 君は手 番

子供どうし 快に私を驚かした。 ょうめんにすわることなんぞははあねえもんだから。」二人は は今まで堅くしていたひざをくずしてあぐらをかいた。「きち 夜食の膳が運ばれた。「もう我慢がなんねえ」と言って、君 のような楽しい心で膳に向かった。君の大食は愉 食後 の茶を飯茶わんに三杯続けさまに飲

夜食をすましてから、 夜中まで二人の間に取りかわされた

きなかった。学問というものに興味がなく、従って成績のお と泥沼の中にめいり込むような家運の衰勢をどうする事もで をそろえて水入らずにせっせと働くにも係わらず、そろそろ 生活の苦しさが加えられて来た。 さびれて行くばかりだったので、

それにつれて君の一家にも 君の父上と兄上と妹とが気

む人を私は始めて見た。

ではここを先途とあらしが荒れまくっていた。部屋の中では楽しい会話を私は今だに同じ楽しさをもって思い出す。戸外)――、 でな部屋を吹雪から守るように見えた。 温 まるにつれて、さな部屋を吹雪から守るように見えた。 温まるにつれて、でいるでき が部屋を明るくしていた。君はがんじょうな文鎮になって小分刈りの濃い頭の毛を逆さになで上げる男ぼれのする君の顔 なんの不愉快な感じも起こさせなかった。人の感覚というも たけれども、それは荒い大海を生々しく連想させるだけで、 ストーブの向か の周囲から蒸れ立つ生臭い魚の香は強く部屋じゅうにこもっ い座にあぐらをかいて、 癖のように時おり五

私も苦しい立場や、自分自身の迷いがちな生活を痛感して、 を消して、曇った顔をしなければならなかったから。そして ではもちろんない。なぜなれば君はしばしば不器用な言葉の尻といい会話と言った。 しかしそれはおもしろいという意味

のも気ままなものだ。

すら凌駕してにぎやかになりそうな気勢を見せた岩内道が絶たれていたのだった。一時北海道の西海岸で、 道が絶たれていたのだった。一時北海道の西海岸で、小樽を札幌で君が私を訪れてくれた時、君には東京に遊学すべきの輪郭を私はここにざっと書き連ねずにはおけない。 暗い心に捕えられねばならなかったから。 さしたる理由もなく、少しも発展しないばかりか、だんだん その晩君が私に話して聞かしてくれた君のあれから . | |港は、 の 生活

札幌を立ち去って行ったのだろう。心あてにしている景色でもかく事 きり ら、 なんとなく暗い顔つきをして、 はそのためだった。 もしろくなかった君が、 てにしている景色でもかく事を、 わかるようだ。 そのさび しくなりまさる古い港に帰る心 そういう事を考え合わすと、 君は故郷に帰っても、 芸術に捧誓したい熱意をいだきなが いらいらしく見えたのが せめてもの 仕 持ちに 事の暇々に 頼みに あ の時 なっ 君が して は、 は た

の

つ

の思慮もせずにこんな生活の渦巻の中に我れから飛び込んだまでの考えののんき過ぎたのに気がついたに違いない。充分をぎ無くなってしるのと えば漁夫とし の力強い小品を作り上げる事ができると思う。 ができなかっ かった獣 い空気のこもった部屋の中で、枕につきながら、 そぎ無くなっているのをまのあたりに見やった時、 を迎えた時、 の漁夫と少しも変わ の有る生活ではなかった。年のいった父上と、 しか 晩だけ ĩ 君の の о О ようないらだたしさを感じて、まぶたを合わ しての健 君 たと君は私に告白した。そうだったろう。 家庭 大きい漁場の持ち主という風が家の中から の心持ちをくわ が君に待ち設けて .康は持ち合わせていない兄上とが、 りのな い 服装で網をすきながら しく考えただけ い たも の は、 どっちか ら、陥穽にか。その晩、磯臭 で、 そん 私は 君の な 。その んそ 根こ す 帰 普通 لح 余 事 言 つ れ IJ 裕

> 海道第 れるは そろえ力を合わして、 浅瀬に変わって、 算違いから、 を出して他人の 君の漁場はすたれ物同様に と戦って、 さわりながら、 ぬだに生活の圧迫を感じて来ていた君の家は、 しかも港内に築かれた防波堤 :一と言われた鰊の群来が年々減って行くために、て他人の漁場を使わなければならなくなったのと めに さび なってから、 波を防ぐ代わりに、 君は一年じゅうかの北海の荒波や激 Ū 出漁に い 漁夫の生活に没頭 命がけに働いても年々貧窮に追 は都合の 船 なってしまい、 が かりのよかった海岸 い が、 砂をどんどん港内 い目 技師の しな ぬきの位置 け やむなく高い駄賃 飛 れ 親子が気心を 6 ば でも は な . に 流 見 ら L い気候 る見る な な かっ し入 い

え上げた。君はすくすくと大木のようにたくましくなった。 に労働 り恥じたりし に近 親身な、やさしい、れ勝ちになって行った。 と荒くれ男らとの交わりは君 つ 一岩内にも漁夫は多い てこの いも 生活 のの生活のために、正しい汗を額に流 ありさまを見て過ごす事はできなく の まっただ中に乗り出した。 てはいられなくなった。 ども腕 そして男らしい心に生まれ が たずから 力 の筋骨と度 にかけておらに そして君はま 胸とを鉄のように鍛 寒暑と波濤 すのを悔 かなうもの つ た。 た君 っし と力 君は君 は ぐら わ い は た

それは短いものではない。 私の前 君は パンのため にすわった君 あたりまえの に生活のどん底まで沈み切った十年 の姿は私にそ 事を言って聞かせるようにこう たいていの人はおそらくその れを信ぜしめ . の 月 言った \Box 年月 た。

厚衣を羽織る身になった。明鯛かきのは、かべいのあった。またでありますのはずに着慣れられようとする生活からのがれる

ックをかけずに着慣れた学校服を脱ぎ捨てて、

出る事をしなかっ

た

んのだ。 君を迎

詰っえ

一人だっていねえ」

を羽織る身になった。明鯛から鱈、たった。

かし

親思いで素直な心を持って生まれた君は、

というように、

四季絶える事のない

しい漁撈の仕事にたず鱈から鰊、鰊から烏賊

の

[にそういう生活からはね返る力を失ってしまうだろう。

、鰊から烏賊って、君は

対し その天授の特異な力を踏み 世の中を見渡すと、何百万、何千万の人々が、こんな生活に くしてまでも、 の上に背負わなければならない不条理だ。特異な力を埋 つ事ができるだろう。 な事だ。しかしだれがこの不条理な世相に非難の石をなげう なってしまったろう。それ て、私たちは尊敬に近い同情をすらささげねばならぬ悲 当面の生活に没頭しなければならない人々に これは しだかれ は全く悲しい事だ。 悲しくも私たちの一人一 て、 、むなしく墳墓の そして不条理 人 あ尽 が 肩 草と

性格の中に植え込まれた憧憬を一刻も捨てなかったのだ。年――それは短いものではない。それにもかかわらず、尹 てる事ができなかったのだ。 パンのために精力のあらん限りを用い尽くさねばならぬ十 君は 捨

です」

しい人生の事実だ。あるがままの実相だ。

かが、 まま、 ぶらりと朝から家を出るのだ。 ったそれ)と一本の鉛筆とを、魚の 鱗 や肉片がこびりついた スケッチ帳 ない漁夫の生活にも、 雨のためとか、 ごわごわにかわいた仕事着のふところにねじ込んで、 一年の間にはたまに来る。そういう時に、 、小学校用の粗雑な画学紙を不器用に網糸でつづ 風のためとか、 なす事なく日を過ごさねば 一日も安閑とし 君は一 っ て は ならぬ幾日 い 冊の b れ

たか何 山がしっくりおら事引きずり込んでしまって、 ら山を見ていると、 物を愛するのはその物を強奪るだと言っていたようだが、 っとこう見ていると、 「会う人はおら事気違いだというんです。けんどおら山 か の 雑誌で『愛は奪う』というものを書い そんな気は起こしたくも起こらない 何もかも忘れてしまうです。 おらただあき て、 だれだっ 人間 [をじ が お

から一時的な満足を求めたり、

生活をゆがんで見る事に興味

たから、 そこいらにすばらし 入れてやってみたらと思うけんど、暮らしも忙 心持ちをかいた絵があらば、 んな下手なものをやってみるが、からだめです。あんな山れて見ているだけです。その心持ちがかいてみたくって、 絵の具は国に引っ込む時、 てもおらにはやっぱり手に余るだろう。色もつけてみたいが、 ありませんね。 れば海でいいが、 おらのような絵にはまた買うのも惜し 天気のいい気持ちのいい日にうんと力こぶを 山を見れば山でいい。 いいいも 絵の好きな友だちにくれてしまっ 見るだけでも見た のがあるんだが、 もったいないくらい いし。 力が足んねえ L いもんだが、 いし、 んな山 海を見 あ

うに堅く 言い現わそうとしていた。 いものになった。 ものになった。その時はあぐらにした両 脛を手でつぶれそと言ったりする君の言葉も様子も私には忘れる事のできな 握って、 胸に余る興奮を静かな太い声でおとなし

いだす事ができないで、ややもするとこじれた反抗や敵愾心どんなにもがいてみてもまだまだほんとうに自分の所有を見 にさえ思えた。 えた。 自然が与えた美妙な優しい心を失わない、 きまく吹雪は露ほども力をゆるめなかった。 に敏感な魂を見いだすのは、この上なく美しい事に私には思 を思った。 私で、妙に寝つかれない一夜だった。踏まれても踏まれ 私どもが一時過ぎまで語り合って寝床にはいって後も、 君一人が人生の生活というものを明るくしているよう 仁王のようなたくましい そして私はだん だん私の仕 君の肉体に 事の 失い得ない君の 君は君 事を考えた。 少女のよう で、 て 私は 吹

の生長に対して君が持 を得ようとしたりする心 そしてその 夜は、 う 君 無意識な謙譲と執着とが私 の の貧しさー いかにも自然な大きな生長 それが私を無念がら の心 کر に強 ŧ そ

い感激を起こさせた。

いだろうとみんなが寄って勧めたけれども、君は素朴なはば頭巾をかぶって、十二分に身じたくをしてから出かけたらい農場の人たちも親身にカオこオとネパー ちんかちんに凍った兵隊長靴をはいを見てからにしろとしいて止めるの ぱ場の人たちも親身にかれこれと君をいたわった。すっかはがなつかしまれるものだ。なごりを心から惜しんでだろう、 着こんで土間に立った。北国の冬の日暮らしにはことさら客 の中に帰りじたくをした。 次の \exists の 朝 こうして は 農場の男たちすらもう少し空模 い ら ń ないと言って、 て、 も聞かず、 黒い 外套をしっかりがいとう 君は 君は 素足に あ b 様 か

ら、 とうとうかすんで見えなくなってしまった。 降りに降りしきる雪の中を、 まで埋まって、 出しにして雪に 君の黒い姿は ますと、ガラス戸を引きあけて戸外に出た。 私はガラス窓をこずいて外面に降り積んだ雪を落としなが 吹きたまったまっ白な雪の中をこいで行く君を見送った。 なぶらせた ある やはり頭巾をかぶらないままで、頭をむき ĺ١ は濃 < ただ一人だんだん遠ざかって、 あるい 君の黒い姿は、 いは薄く、 縞になって横 白い地面 に腰

事だった。 私がそこを発って東京に帰ったのは、それから三四日後の調なさびしさと降りつむ雪とに閉じこめられてしまった。

そして君

取り残され

た事務所

は、

君の来る前

のよう

な単

匹

家にとっては夢と現との閾はないと言っていい。彼は見るように君の生活とその周囲とを私に見せてくれる。 みたいのだ。 いうも し出してみる事を君は拒むだろうか。 を見ながら眠っている事があ 頭に描く。 けばしい赤色をまき散らす季節にはなったろう。 海面 薄濁るほどにもなってはいまい。 太陽 か いる事がある。 はまた妙に君を思い出す。 日攻めよせているだろう。 でいる。 かろう。 今は東京の冬も過ぎて、 が、 の生み出す慈愛の光を、 君の の力がどの ややもすると角立った波をあげて、 君はまざまざと私 住 私が私 の寛大はそれを許してくれる事と私は む岩内の港の水は、 くらい働きうるかを私は自分でため の 想像 梅が咲き椿が咲くようになった。 君の張り切った生活のありさまを それにしてももう老いさらぼえた の想像の視野に現わ る。 地面は にまかせて、ここに君 夢を見ながら目を 鋼鉄を水で溶かしたような まだ流れ 胸を張 私の 鈍い頭に り広げて吸 岸を目がけて てむ雪解 ħ このころ私 出て来て、 . も同 見開 の姿を写 彼は現実 の水に きめて 芸術 |感と 7

君を思い出すにつけて、私の頭にすぐ浮かび出て来るのは、

なんと言ってもさびしく物すさまじい北海道の冬の光景だ。

五

が、小体みもなくその胴腹に噛いかかっている。砂浜に繁わ黒い姿を遠く海の面に横たえて、夜目にも白く見える波濤の牙長く突き出た造りぞこねの防波堤は大蛇の亡骸のようなまっ長い冬の夜はまだ明けない。雷電峠と反対の湾の一角から 行く。 風が からにしなければならぬ。町のほうは寝しずまって灯一つ見る信号だ。船を出すには一番鳥が鳴きわたる時刻まで待って い闇の中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の目のようにぎ上に建てられた組合の天気予報の信号灯を見やっている。 そばに、さまざまの漁具と弁当のお櫃とを持って集まって来みつきながら、長い帆柱を左右前後に振り立てている。その えない。 りと光っている。 った海岸には、 うから沖 うに空低くかかっている。 た漁夫たちは、 れた百艘近い大和船は、 風が雪に閉ざされ それらのすべてをおおいくるめて凍った雲は幕 空気そのものをかっさらってしまいそうな激し しぐらに水と空との閉じ目をめがけて突きぬけて ほうへと絶え間なく走り続ける。 見渡せる限り、白波がざぶんざぶん砕け 言葉少なに物を言いかわしながら、防波堤 赤と白との二つの球は、 た山を吹き、 舳を沖のほうへ向けて、互いに 音を立てないばかりに雲は山 漁夫を吹き、 危険警戒を標示す の目のようにぎら 海 まで雪に を吹きまく |埋ま しが い のほ の j 寒 暗 の

漁夫たちの群れから少し離れて、一団になったお内儀さん

た天と地とにみなぎり満ちる。それがしずまると、風の生み出す音の高い不思議な沈黙がまたちの背中から赤子の激しい泣き声が起こる。しばらくして

鈍い土がまだ振 にした から、 ら、硫黄が丘の山頂――右肩をそやや二時間もたったと思うころ、 が雲の産んだ鬼子のように、 り向きも しないうちに、 右肩をそび あや目も つやかし 空中に現わ 空はいち早くも て、 知れ な 左をなで肩 れ い 闇ゃ 出る。 の中

光を吸い

初めたのだ。

こえだす。 れず、 をする) 老練な漁夫が乗り込んでいて、 石のような不動の沈黙から急に生き返って来る。 模範船 あの昼にはけうとい羽色を持った 鳥 の声が勇まし の船 (港内に四五艘 漁夫たちの群れもお内儀さんたちのか が頭をあつめて相談をし始める。 あるのだが、船も大きい 他の船にかけ引き進退 どことも たまり それ の合図 聞 知

「出すべ」

塩辛声が高くこう響く。 おからこれ そのさざめきの間に、潮で鏽び切った老船頭の幅の広い

後の高 開き切り開き、 夫たちが膝頭 たちは右に左に夫や兄や情人やを介抱して駆け歩く。 声がひとしきり聞こえたと思うと、 陶酔したようにたわいもなく波に揺られていた船 ていた所を歩み離れてめいめいの持ち場につく。 漁夫たちは力強い鈍さをもって、互いに今まで立ち尽くし 右に左に揺らぎながら、船首を高くもたげて波頭を切り い の o) 頭まで水に浸って、 しりの声とともに、 狂いあばれる波打ちぎわから離れて行く。 わめき始める。 今までの鈍さに似ず、 船はよんどころなさそう の がの艫€ の お内儀さん しり騒ぐ には漁 今まで

の中に幾本も突き込まれる。船はやむを得ずまた立ち直ってすると、紬を岸に向けようとする船の中からは、長い竿が水ゆる漁夫は、猿のように船の上に飛び乗っている。ややとも

沖を目ざす。

o を思 うに、 やと騒ぐ聴衆のような雲や波の擾。乱の中から、漁夫たちのレッグロで終わる音楽の一片を思い起こさすだろう。がや 早くなる一定のテンポを取って沖に乗り出して行くさまは、 始めのうちは周囲の騒音の中に消されているけれども、 たそこには、いつでも音楽が生まれるものと見える。 力強い楽手の手で思い存分大胆にかなでられる Allegro Molt だんとその運動は熱情的となり力づいて行って、 い Largo pianissimo とも言うべき運動が起こって、それが 漁夫の乗り込んだ舟が波を切り波を切り、だんだんと い出させずにはおかぬだろう。すべてのも の 嵵 の人々の気組み働きは、だれに でも激烈なア の 霊を得たよ の緊張し がやが だん 鈍

消えて行く。

う に 艪っ の火箸に火の起こった炭をはさんで高くあげると、それがではりのように流れる炭火の火の子とをながめやる。長い 暗に襲いかかる波のしぶきをしのぎ分けて、 を食って盛んに火の子を飛ばすのだ。 漁夫たちは艪をこぎながら、 たちの群れはもう命のない黒い石ころのようにしか見えない。 遠ざかって行く。 の物悲しい北国特有な漁夫のかけ声に励まされながら、まっ 船はもう一個の敏活な生き物だ。船べりからは百足虫のよ の足を出し、 その黒 海岸にひとかたまりになって船を見送る女 い石ころと、模範船 艫からは鯨のように舵の尾を出して、 帆綱を整えながら、浸水をく すべての船は始終それ の艫から一字を引 沖へ沖へと岸を ょ 鉄 あ い

その光が運命の物すごさをもって海上に長く尾を引きながら光は、幾百人の漁夫たちの命を勝手に支配する運命の手だ。散らしながら青い炎を放って、燃え上がり燃えかすれるその時、闇を、物々しく立ち騒ぐ風と波との中に、海面低く火花をられた時には安全になった印として再び進まねばならぬのだ。られた時には、天候の悪くなる即と見て船を停め、二つあげを目あてにして進退をしなければならない。炭火が一つあげ

球は、 て、 のような光に燃えて、山ふところの雪までも透明な藤色りたたいたりして叢立ち急ぐ嵐 雲は、炉に投げ入れられ の上に現わしている、その肩のような雷電峠の絶巓 夜の闇は暗く濃く沖のほうに追いつめられて、東の空には黎明と、長い北国の夜もようやく明け離れて行こうとするのだ。 り、ややしばらく風に逆らってじっとこたえてから、思い 小さく呼びかわすこの海の砂漠の漂浪者は、て風を切りながら、船の上に現われて来る。 まって海に落ち込んだ悪魔が、 の新しい光が雲を破り始める。 白い羽根がある瞬間には明るく、ある瞬間には暗く見えだす したように打ち連れて、 来て波に腹をなでさすかと思うと、翼を返して高く舞い上が めてしまう。それにしても明け方のこの どこからともなく海鳥 なんという寒い空の風だ。 今そのいちばん冷たい呼吸を呼吸しているのだ。 の群れが、白く長い翼に羽音を立て 小気味よく風に流されて行く。 長い夜のために冷え切った地 肉付きのいい右の肩だけを波 物すさまじい朝焼けだ。 暖かい光 さっと落として 猫のような声で 東の空には黎明 の色に比べ をな その でた

二尋置きに本縄から下がった針に餌をつけるのに忙しい。 雲一片の 徴 をさえ見落とすまいと注意しながら、 ら生まれて来たような老漁夫の、皺にたたまれた鋭変化のはげしいそのころの天気模様を考えている。 うに小さくなった船の中で、君は配縄の用意をしながら、 父上は舵座にあぐらをかいて、 を目がけて波を切り開いて走りながら、 の上を見渡すと、港を出てからてんでんばらばらに散らばっ て帆を立て直している。 を呼び起こしながら、 由にならない手のひらを腰のあたりの荒布にこすりつけり のような深い落ち付きを見せている。君の兄上は、凍って自 いまでに荘厳なこの日の序幕をながめているのだ。 朝の光に白い帆をかがやかした船という船は、 帆綱を握って、 雇われた二人の漁夫は二人の漁夫で、 時々晴雨計を見やりながら、 風の向きと早さに応じ 君の船と同様な仕事 顔には木彫 海の中か 等しく沖 Ü 眼 て熱 は、 海 恐

う走っているかをすぐ見て取る事ができる。 海中に突き入った陸地と海そのものの 界 とも言うべき瀬がど やがて瀬は達せられる。 夜が明け離れると海風と陸風との変わり目が来て、さすが がちな北国 [の冬の海の上もしばらくは穏やかになる。 君らは水の色を一目見たば かりで、

にいそしんでいるのだ。

く来るまでかからねばならないのだ。 横たえられるまでには、 五町から三十町に余る長さをもった縄全体が、 右なり左なりに向け直される。 がおろされる。 の中にざぶんざぶんと投げこまれ 勢いで走りつづける船足は、 朝早くから始めても、 同時に浮標の付い 君らの船は艪にあやつ 日が子午線近 海上に長 た。これではいた。これではいた。これではいなった。のために る。 マと

> 雲間 ざぶり・・・・寒気のために比重の高くなった海の水は、 られて、 かった油のような重さで、 !を漏れる日光で鈍く光る配縄の餌をのみ込んで行く。 横波を食いながらしぶしぶ進んで行く。ざぶり・・・・ 物すごいインド藍の底のほうに、 凍りか

の

見る見る薄い糊のような青白い膜に隔てられる。 光を恵んでいた空が、 をそむけながら、配縄を丹念におろし続ける。 板を打つ。君は小ざかしい邪魔者から毛糸の襟巻で包ん は小さな白い粒がかわき切った音を立てて、 < 、時雨のような。霰が降って来て海面を泡立たす。船と船とはしてれ 今まで花のような模様を描いて、海面 急にさっと薄曇ると、どこからともな のところどころに日 えりまきあわただしく船 君の周

輪郭を描いて、波にもまれながらさびしく漂っている。 のしかめ方をする。そして日が西に回るに従ってこのふきげ んは募って行くばかりだ。 きげん買いな天気は、一日のうちに幾度となくこうした顔

してまっさおな海面に、

漁船は陰になりひなたになり、

霰はどこかへ行ってしまった。

そ

すっと空が明るくなる。

しながら五人の男は、舵座におこされた焜炉の火のまわりにはひるまずにはいられない。配縄を投げ終わると、身ぶるい寒暑をかまっていられない漁夫たちも吹きざらしの寒さに こかしこに漂わせている。 慕い寄って、大きなお櫃から握り飯をわしづかみにつかみ出 して食いむさぼる。港を出る時には一かたまりになっていた 心細い弱 ぱ々しそうな姿を、涯もなく露領に続く海原のこれの葉のように小さく互い互いからかけ隔たっ 三里の余も離れた陸地 ば 高 山々 のこ

の半腹から上だけを水の上に見せて、

降り積んだ雪が、

日を

に険しい輪郭を描いている。 受けた所は銀のように、雲の陰になった所は鉛のように、妙

てしまおうと幾度試みても、すぐあとからまくしかかって来かいながら、なんという悲しい心の 距 りだろう。押しつぶし邦人である事に気づく。同じ艪をあやつり、同じ帆綱をあつている。そういう時に君だけは自分が彼らの間に不思議な異さまや、きょうの予想やらをいかにも地味な口調で語り合っ漁夫たちは口を食物で頬張らせながら、きのうの 漁のあり

る芸術に対する執着をどうすることもできなかった。

玉の緒で炊き上げたような飯を食って一生を過ごして行かね毎日、一命を投げてかかって、緊張し切った終日の労働に、 不平もなく、素直に受け取り、「軛」にかかった輓牛のような柔 彼らがこの目ざましいけなげな生活を、 ばならぬ漁夫の生活、それにはいささかも遊戯的な余裕がな らなろうという人の少ない世の中に、 しみ仰がれ、 みがいある男と見え、死んでは万人にその英雄的な最後 胸をしめ上げられる。 姿を見ると、 順な忍耐と覚悟とをもって、 しかし当然な正しい生活として、誇りもなく、矯善飾 は現わし得ないほど尊さと厳粛さとを持っている。ましてや いだけに、命とかけがえの真実な仕事であるだけに、言葉に の中に、生きては人の冒険心をそそっていかにも雄々し とはいえ、 君は人間の運命のはかなさと美しさとに同時に 飛行機の将校にすらなろうという人の少ない 遺族まで生活の保障を与えられる飛行将校にす 勇ましく迎え入れている、 荒れても晴れても やむを得ぬ、苦しい、 飾もなく、 その を惜 毎日 い 頼 世

こんな事を思うにつけて、君の心の目にはまざまざと難破

そして果てしもなく回想の迷路をたどって歩く。々の会話からは遠のいて、物思わしげに黙りこくってしまう。他の漁夫と同様に握り飯を食ってはいるが、いつのまにか人船の痛ましい光景が浮かび出る。君はやはり舵座にすわって

配縄を切って捨てさせなければならなくなった。吹き始めた暴風は一秒ごとに募るばかりで、船頭はやむなく込む波濤と戦いながら配縄をたくし上げにかかったけれども、でも気づかいながら仕事を続けていた漁船は、打ち込み打ち模範船からすぐ引き上げろという信号がかかったので、今まそれはある年の三月に、君が遭遇した苦い経験の一つだ。

を切ってしまった。と君の父上は心から嘆息してつぶやきながら君に命じて配縄「またはあ銭こ海さ捨てるだ」

て、海とすれすれに波の上を矢よりも早く飛び過ぎて行く。れるように高まったがのがれたり、さながら風の怒りをいどむなく倒れかかる。目も向けられないような濃い雪の群れは、取っ組み合っただけの波はたちまちまっ白な泡の山に変じて、取っ組み合っただけの波はたちまちまっ白な泡の山に変じて、取っ組み合うに、面憎く舞いながられないような濃い雪の群れは、中寒魔のように、面憎く舞いながられないられる過れの山に変じて、東の組み合うに、面憎く舞いながられないような濃い雪の群れは、東の上はただ狂い暴れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹き海の上はただ狂い暴れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹き

を少しなりとも防ごうためだ。君の兄上は帆綱を握って、舵座がら二本突き出して、動かないように結びつける。船の顛覆が 進路を後ろに伝える。二人の漁夫は大竿を風上になった。舷上でで腰を据えながら、右手に磁石をかまえて、大声で船の なっている。そしてその間にもしっきりなしに打ち込む浸水にいる父上の合図どおりに帆の上げ下げを誤るまいと一心に て舳のほうへにじり寄り、 互い互いの声は妙に上ずって、風に半分がた消されながら、 を急がしく汲んでは舷から捨てている。命がけに呼びかわ

「おも舵っ」 「右にかわすだってえば」

それでも五人の耳には物すごくも心強くも響いて来る。

|帆綱をしめろやっ| 「右だ・・・・右だぞっ」

「友船は見えねえかよう、いたらぐっつけやーい」

から、見上げるような大きな水の堆積が、想像も及ばなて行った。言葉どおりに水平に吹雪く雪の中を、後ろのしく見える三角波は、だんだんと丘陵のような紆濤に変 さでひた押しに押して来る。 方向を定めると、これまでただあてもなく立ち騒いでいたら どう吹こうとためらっていたような疾風がやがてしっかり 想像も及ばない早 変わっ ぼう

「来たぞーっ」

られて、艫が薄気味悪く持ち上がって、船中に置かれた品物 まぶしいほど早かった船足が急によどんで、後ろに吸い寄せ 緊張し切った五人の心はまたさらに恐ろしい緊張を加えた。

> 目の前の空を高くしきりながら、 えるような窓の混乱の中に船をもまれながら行く手を見ると、 る大きな音を立てて、紆濤は屛風倒しに倒れかもとすさまじい勢いで波の背をすべり下った。 船はひとあおりあおって、 ががらがらと音をたてて前にのめり、人々も何かに取りつい て腰のすわりを定めなおさなければならなくなった いったんこわれた波はすぐまた物すごい丘陵に立ちかえって、 物すごい不動から、 見る見る悪夢のように遠ざ しに倒れかえる。わきか 奈落の底まで 同時に耳に余 に

かって行く。 ほっと安堵の息をつく隙も与えず、 水の山だ。 その時 後ろを見ればまた紆濤

す

「あぶねえ」 「ぽきりっ」

君は咄嗟に身をかわして、頭から打ってかかろうとする帆うに目をむいて、大きく口をあけた君の兄上の顔とが映った。 柱から身をかばった。人々は騒ぎ立って艪を構えようとひし うにしわになってたたまる帆布と、その陰から、飛び出しそ とから折れて横倒しに倒れかかる帆柱と、急に命を失ったよ 獣の敏感さをもって身構えしながら後ろを振り向いた。 というけたたましい声を同時に君は聞いた。そして同時に 根も

た。帆の自由である限りは金輪際船を顛覆させないだけの自めいた。けれども無二無三な船足の動揺には打ち勝てなかっ

第一の紆濤、第二の紆濤、第三の紆濤には天船は波の動揺のまにまに勝手放題に荒れ狂った。 第三の紆濤には天運が船を顛覆

はいられなかった。船足のとまった船ではもう舵もきかない。

帆を奪い取られては途方に暮れ

ないで

信を持った人たちも、

時、船中の人々は観念しなければならなかった。からかばってくれた。しかし特別に大きな第四の紆濤を見た

られた。鱸を波のほうへ向ける事も得しないで、力なく漂ても波の反対の側をひた押しに押す風の激しさ強さが思い 消え、 は、 猛獣のように思いきり背延びをした。と思うと、 船の前まで来ると、波の山は、 囲には気味の悪い静かさが満ち広がった。それを見るにつけ 吹き荒れる風すらがそのためにさえぎりとめられて、 つける風にそりを打って鞺とくずれこんだ。 雪のために 火が燃え立つように、ちらりちらり白い波、頭が立っては雪のために薄くぼかされたまっ黒な大きな山、その頂から 消えては立ちして、瞬間ごとに高さを増して行った。 いきなり、 獲物に襲いかかる 、力なく漂う 波頭は 船の周 吹き や

所には、 大声を揚げて何か言ってるらしかった。しかしお互いに大き てはすべりしていた。君は大声を揚げて何か言った。兄上も がかりの た船体にしがみつこうともがいていた。見ると君の目の届 を引きちぎられるほどもまれながら、 な口をあ はっと思ったその時おそく、君らはもうまっ白な泡に五分ける風にそりを打って鞺とくすれことけ 割合に小さな波があとからあとから押し寄せて来て、 くの 君の兄上が頭からずぶぬれになって、 が見えるだけで、声は少しも聞こえて来ない。 に手をあてがってはすべり、 手をあてがっ ぬるぬると手 船を < 体

> 君の思案といい、 すら物すごいほどだった。空といい、海といい、 心の底は不思議に気味悪く落ちついていた。 考えた。心の上澄みは妙におどおどとあわてている割合に、 余席の有る限りはどうあっても生きなければならぬ」「死には しないぞ」とちゃんときめ込んでいるのがかえって薄気味悪 しい盲目な生の事実が、そしてその結論だけが、目を見すえ しないぞ」という本能の論理的結論であったのだ。 かった。それは「死ぬのがいやだ」「生きていたい」「生きる い 中に、 君の心の底だけが悪落ち付きに落ち付いて、「死には 一つとして目あてなく動揺しないものはな 、それは 船とい この恐ろ 君自身に

い上がるようにしたので、船は一方にかしぎ始めた。し合わしたように、いっしょに力を合わせて、船の胴腹にはら、四人とも君のいる。舷。のほうへ集まって来た。そして申人の心も君と変わりはないと見えて、険しい困苦と戦いなが船なりにも顛覆した船を裏返す努力に力を尽くした。残る四君はこの物すごい無気味な衝動に駆り立てられながら、水

たように、

君の心の底に落ち付き払っていたのだった。

同はまた懸命な力をこめた。 君の父上がしぼり切った生命を声にしたように叫んだ。

「それ今ひと息だぞっ」

海の中にもぐり込みながら、 船が裏返る拍子に五人は五人ながら、 ながらもとにかく船は真向きになって水の面に浮かび出た。 大きな波が浴びせこんで来たので、 わった船 おりよく — は くるりと裏返った。 -全くおりよく、 急に勢いづいて船の上に飛び上 天運だ 舷までひたひたと水に 片方だけに人の すっぽりと氷のような その時船 が横ったい 重 に埋もれ りの 加

で、

目と鼻ぐらいの近さに押し迫った死からのがれ出る道を

着込んだ厚衣の芯まで水が透って鉄のように重い

一心不乱に動かす手足と同じほどの忙

しさ

の

にもかかわらず、

揺り上げたり押しおろしたりした。

そのたびごとに君たちは

を絶たれて、

水の中に漂わ

ねばならなかった。

そし

それにも係わらず君たちは頑固に自分たちの存在を主張した。 咄嗟に反対の舷に回った。そして互いに顔を見合わせながら、本能は恐ろしいほど敏、捷な働きをする。 五人の中の二人は どちらかをしそうな表情 雪も風も波も君たちを考えにいれてはいないのに、 にも及ばない。 で行なわれたのだ。怒った自然の前には、人間は塵ひとひら て男泣きに泣くか、それとも我れを忘れて狂うように笑うか、 れを君は忘れる事ができない。次の瞬間にはわっと声をあげ た人々の顔に現われたなんとも言えない緊張した表情 ほうを船底 にきまっている。 透っていて、 がろうとした。 一度にやっと声をかけ合わせて半身を舷に乗り上げた。 舷を乗り越して奔馬のような波頭がつぎついてもそれらに君たちを考えさせようとした。 と、海面をこすって飛ぶ雲とで表わされる自然の憤怒の中すべてこうした懸命な努力は、降りしきる雪と、荒れ狂う それが一方の舷に取りついて力をこめればまた顛覆する は恐ろしいほど敏 捷な働きをする。五人の中の二 吸い寄せられながらも、 ややともすれば人々を波の中に吸い込もうとし しかししこたま着込んだ衣服は思うざまぬれ 人間などという存在は全く無視されている。 生死の瀬戸ぎわにはまり込んでいる人々 ――それを君は忘れる事ができない。 半身を水から救 君たちは しヽ 足の 一人は . の そ

うにしっかり握っていた。そして舷から身を乗り出して、子るものは長いたわしの柄を、何ものにも換えがたい武器のよがら、死からのがるべき一路を切り開こうとした。ある者は艪された得物をなんでもかまわず取り上げて、それを働かしなて行く。それに腰まで浸しながら、君たちは船の中に取り残蔵、を乗り越して奔馬のような波頭がつぎつぎにすり抜け

ようがない。東西南北は一つの鉢の中ですりまぜたように渾沌敏捷さで方角を嗅ぎ慣れている漁夫たちも、今は東西の定めきまくる。目に見える限りはただ波頭ばかりだ。犬のようなでき落ちる気配も見えないあらしは、果てもなく海上を吹供がするように、水を漕いだり、浸水をかき出したりした。

喚。ほかにはなんにもない。 薄い暗黒。天からともなく地からともなくわき起こる大叫

としてしまった。

得ない心の中に、 少しもわ 時間というもののすっかり無くなってしまったこの世界では 見るにつけても、 けがはっきり君の目に映った。「死にはしないぞ」 た事になったと思ったころだった、 わからない言葉を大きな声で叫んだのは。 んから生々しい色の血が幾条にもなって流れていた。 の底は妙に落ち着いて、薄気味悪くこの一事を思いつづけた。 「死にはしないぞ」――そんなはめになってからも、 こういう必死な努力が何分続いたのか、何時間続 君のそばには一人の若い漁夫がいたが、その右の顳顬のへ からない。 君はまたしみじみとそう思った。 疲労という感じを覚えだして、これ しかしながらとにかく君が何ものも納れ 突然一人の漁夫が意味の 今まででも五人が しい たの それだ は それを 君の心 困っ か、

た。いて、その漁夫が目をつけているほうへ視線をたどって行っいて、その漁夫が目をつけているほうへ視線をたどって行って、残る四人は思わず言い合わせたようにその漁夫のほうを向

叫び声は不思議にきわ立ってみんなの耳に響いた。

五人ながら始終何か互いに叫び続けていたのだったが、

をいっぱいに開いて、矢よりも早く走って行く一艘の船 に乗って四十五度くらいの角度に船首を下に向けながら、 濃 い吹雪の幕のあなたに、さだかには見えないが、波の背の ļ 帆

は りは白堊のような生白さに見えていた。 に向けたまま、矢のように走って行く。降りしきる吹雪を隔 に船首を下向きにしたまま、 子もない。いつまでも目の前に見えながら、四十五度くらい に向いたままである。 水の上に割合に高く現われている船の胴も、 てた事だから、 かりで、急いで働かすべき手はかえって萎えてしまっていた。 かる君自身すら、心がただわくわくと感傷的になりまさるば ほうへ向けようとしているらしい者はなかった。それをいぶ く見つめていた。そのくせ一人として自分らの船をそっちの 立てた漁夫が、目を大きく開いて見つめているあたりを等 ら近寄って行かねばならぬはずだった。余の人たちも君と同 何はさておいても君たちはその船を目がけて助けを求めなが た。君は思わずすすり泣きでもしたいような心持ちになった。 白い帆をいっぱいに開いたその船は、依然として船首を下 それを見ると何かが君の胸をどきんと下からつき上げて来 波の腹に乗っても波の背に乗っても、 確かに何物かを目の前に認めたらしく、 乗り組みの人の数もはっきりとは見えないし、 風の強弱に応じて帆を上げ下げする様 矢よりも早く走って行く。 、そして不思議な事に 舳 は依然として下^{へteb} 木の色というよ 奇怪な叫び 声 , を L

上がってしまった。同時に船はだんだん大きくぼやけて行っまま矢よりも早く走っている。君の頭はかあんとしてすくみれていた。波頭から三段も上と思われるあたりを船は傾いだぎょっとして気がつくと、その船はいつのまにか水から離

に薄れて行って、やがてはかき消すように見えなくなってしと思うまもなくその白い大きな帆さえが、降りしきる雪の中い帆だけが矢よりも早く動いて行くのが見やられるばかりだ。た。いつのまにかその胴体は消えてなくなって、ただまっ白

けだった。 くもみさいなまれる君たちの小さな水船・・・・やっぱりそれだかわす雲の霧。自然の大叫喚・・・・そのまっただ中にたよりな「怒濤。白沫。さっさっと降りしきる雪。目をかすめて飛びまった。

味悪くそう思いつづけた。夫たちの不安げな様子を見るにつけて、君は懲りずまに薄気不思議な事にはそのぶっ倒れた男を見るにつけて、また漁

「死にはしないぞ」

船とをつなぎ合わせ、半分がた凍ってしまった帆を形ばかりたように見えた漁夫たちが、必死になって君たちの船とそのちには無関心ではなかったと見える。急に十倍も力を回復しれほどの時間がたっていたろう。しかしとにかく運命は君た君たちがほんとうに一艘の友船と出くわしたまでには、ど

らと胸の先にこみ上げて来た。も言えない幸福な感謝の心が、おさえてもおさえてもむらむに張り上げて、風の追うままに船を走らせた時には、なんと

仕事にかかった。 夫を卒倒したまま胴の間の片すみに抱きよせて、すぐ自分の慢してくれと心の中にわびるように言いながら、君は若い漁番く所に着いてから思い存分の手当をするからしばらく我

れ込む。

思わず足爪立てんばかりに総立ちになった。人々の心までが陽が西を見つけ出したようなその喜び……船の中の人たちは前に現われたのだ。それを見つけた時の漁夫たちの心の勇み前に現われたのだ。それを見つけた時の漁夫たちの心の勇み出した。山脚は海の中に、山頂は雲の中に、山腹は雪の中にやがて行く手の波の上にぼんやりと雷電峠の突角が現われ

な‥‥雪崩にも打たせんなよう‥‥」「峠が見えたぞ‥‥北に取れや舵を‥‥隠れ岩さ乗り上げん総立ちになった。

して、横波を食わせながら船を北へと向けて行った。 のを、漁夫たちはそうはさせまいと、帆をたて直し、艪を押吹雪の間からまっ黒に天までそそり立つ断崕に近寄って行く見る見る風と波とに押しやられて船は吸い付けられるように、れた瀬にいたものが、いつのまにかこんな所に来ているのだ。しても船はひどく流されていたものだ。雷電峠から五里も離して、横波を食わせながら船を北へと向けて行った。

る野馬のように、

波頭は波の穂になり、波の穂は飛沫になり、

鬣を風になびかして暴れただがみ

陸地に近づくと波はなお怒る。

六丈も高く飛ばして、反りを打ちながら海の中にどっとくずえった熱湯をぶちつけたように、湯げのような白沫を五丈もかかって行く。山すその岩壁に打ちつけた波は、煮えくりか波になって、息もつかせずあとからあとからと山すそに襲い飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまたまっ白い

できた。 は、大きさを増して、領星の大波はたちまちおい退けれて、すさまじい地響きとともに、何百丈の高さから一気になどがしーん・・・さあーっ・・・。広い海面が目の前でまっ白な平野になる。山のような五百重の大波はたちまちおい退けな平野になる。山のような五百重の大波はたちまちおい退けな平野になる。山のような五百重の大波はたちまちおい退けな平野になる。山のような五百重の大波はたちまちおい退ける平野になる。山のような五百重の大波はたちまちおい退ける平野になる。山のような五百重の大波はたちまちおい退ける、すさまじい地響きとともに、何百丈の高さから一気にない。 がら吹き起こる・・・・その物すさまじさ。

ねばならぬ。よう自由になる事のできた船は、また揺れ動く波の山と戦わ命に東北へと舵を取る。磁石のような陸地の吸引力からようったちの船は悪鬼におい迫られたようにおびえながら、懸

として火花を散らしながら闇の中に消えて行く。それを目が標の烽火が紫だって暗黒な空の中でぱっとはじけると、鬖々の二倍も乗っているように船は動いた。岸から打ち上げる目漁夫たちの力は急に五倍にも十倍にもなった。今までの人数へれでも岩内の港が波の間に隠れたり見えたりし始めると、

よりもかえって力強く人々の胸に響いた。だ。その不思議な沈黙が、互いに呼びかわす。惨らしい叫び声けて漁夫たちは有る限りの艪を黙ったままでひた漕ぎに漕い

うへ船を向けようとひしめいた。第二の爆声が聞こえた。縄二三段隔たった水の中にざぶりと落ちた。漁夫たちはそのほ救助縄が空をかける蛇のように曲がりくねりながら、船からの間にも大砲のような音が船まで聞こえて来た。と思うとぎ立てている群衆が見やられるまでになった。やがてあらし船が波の上に乗った時には、波打ちぎわに集まって何か騒

った。 二三人の漁夫がよろけころびながらその縄のほうへ駆け寄

はあやまたず船に届いた。

かの空にぱっと咲いてはすぐ散って行く。 音は聞こえずに烽火の火花は間を置いて怪火のようにはる

ぐりながら、半死のありさまで進んで行った。いにしっかりしがみ合った二艘の船は、半分がた水の中をくが浅くなったために無二無三に乱れ立ち騒ぐ波濤の中を、互船は縄に引かれてぐんぐん陸のほうへ近寄って行く。水底

にも熱い涙が浮かんで来た。君の父上はそれを見た。骨肉の愛着にきびしく捕えられてしまった。君の目には不覚上とを見つめていたのだ。そう思うと君はなんとも言えないり返って見た。父上はひざから下を水に浸して舵座にすわっり返って見た。父上はひざから下を水に浸して舵座にすわっ

「お前が助かってよかった」

あなたが助かってよござんした」

水難救済会の制服を着た人たちが、右往左往に駆け回るあり内の町が、新しく生まれ出たままのように立ち列なっていた。君は満足しきってまた働き始めた。もう目の前には岩内のは離れようとしなかった。そうしたままでしばらく過ぎた。合った。そしてこのうれしい言葉を語る目から互い互いの目両人の目には咄嗟の間にも互いに親しみをこめてこう言い

でのように今まで黙っていたほかの漁夫たちの口からも、うあとからと君の類を伝って流れた。つかんだ。そして矢声をかけながら漕ぎ始めた。涙があとからのどん底からむらむらとわき出して来る新しい力を感じて、腹のどん底からむらましい新しい力――上げ潮のように、なんとも言えない勇ましい新しい力――上げ潮のように、

さまもまざまざと目に映った。

は梭のように波を切り破って激しく働いた。やにわに勇ましいかけ声があふれ出て、君の声に応じた。艪

ぼんやりした感じに襲われて来た。なった。と思うと君はだんだん夢の中に引き込まれるような岸の人たちが呼びおこす声が君たちの耳にもはいるまでに

やがて船底にじゃりじゃりと砂の触れる音が伝わった。船をひき起こさせなかった。ている。しかしその姿は前のように君になんらの迫った感じ君はもう一度君の父上のほうを見た。父上は舵座にすわっ

られた。 は滞りなく君が生まれ君が育てられたその土の上に引き上げ、やかて船底にじゃりじゃりと砂の触れる音か伝わった。船

「死にはしなかったぞ」

・・・・君はそのあとを知らない。と君は思った。同時に君の目の前は見る見るまっ暗になった。

七

のだ。 がら、 を上げて、そろそろとその人に近寄って来る。ガラガラ蛇にに近寄る冒険を躊躇する。そうすると死はやおら物憂げな腰で、ダクダナしょしょぶ ー・ー・F・扌・ があまり無頓着そうに見えるので、 くその生はまた尽きて行く。そうするとまた死の目の色を見 ともなんとも言いようがない。 生きて行く姿はそんなふうにも思いなされる。 でしまう。 見こまれた小鳥のように、 上にはいない。 に高慢にふるまおうとする。 すまして、 い取って来た生をたしなみながらしゃぶるけれども、 のように生の一片をひったくって逃げて来なければならな っちから死に近づいて、死の油断を見すまして、かっぱらい まで行かなければならないのだ。いわば捨て身になって、 人間というものは、生きるためには、 思い出す。なんという真剣なそして険しい漁夫の生活だろう。 は漁夫たちとひざをならべて、同じ握り飯を口に運び 死の姿がいよいよ恐ろしく目に映り始める。そしてそれ 心だけはまるで異邦人のように隔たってこんなことを 死は知らんふりをしてそれを見やっている。 次の瞬間にその人はもう地の上にはいない。 死のほうにぬすみ足で近寄って行く。ある者は死 ある者は年とともにいくじがなくなって行 その と鬼一口だ。もうその人は地 その中にも漁夫の生活の激し 人は逃げも得しないですくん 、つい気を許して少し大胆 いやでも死のそば近く 実にはかな 、 人間 ほどな は 奪 な の い つ

> つけて、 だって人間というものはこんなしがない苦労をして生きて行 を惜しまず働く姿はほんとうに悲壮だ。 枚の下は地獄のような境界に身を放げ出して、 養わなければならない親や妻や子のために、 せず、生きるという事はすべてこうしたものだとあきらめを みどころだ。その生活はほんとに悲壮だ。彼らがそれを意識 偽善も弥縫もある程度までは通用する。 さは格別だ。彼らは死に対してけんかをしかけんばかりの切羽 したくもない。 あるとさえも考えられる。 つまった心持ちで出かけて行く。 疑いもせず、不平も言わず、自分のために、自分の 真裸な実力と天運ばかりがすべての漁 海の上ではそんな事は薬の足しには通用する。ある意味では必要で 陸の上ではなんと言っても そして惨めだ。なん【して、せっせと骨身 毎日毎日板子一 夫の 頼

のだ。 には、 者の贅沢の一つである癇癪に漏らせばたく 行楽に身を任せて、 じゅうこれと言ってする仕事もなく、退屈をまぎらすための 先から受け嗣いで、小樽には立派な別宅を構えてそこに 妾をさびれて行くこの岩内の小さな町にも、二三百万円の富を祖 ように送っている人もある。都会とは言うまい。だんだん しくかけ隔たってしまったのだ。 の男をよく知っている。 て、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えないくせに、一 住まわせ、 かなければならないのだろう。 世の中には、ことに君が少年時代を過ごした都会という所 それが十年かそこらの年月の間に、 毎日毎日安逸な生を食傷するほどむさぼって一生夢の 自分は東京のある高等な学校をともかくも卒業し それでも使い切れない精力の余剰を、 小学校時代には教室まで一つだった 君はそんな人たちを一度で しているの 二人の生活は恐ろ が がある。 君はそ 年

の倦怠からのがれるほかはあるまいとひそかに同情さえされく。金があって才能が平凡だったら勢いああしてわずかに生 らが彼らの導くような生活をするのは道理があると合点が のむなしさを想像する充分の力を君は持っている。 もうらやましいと思った事はない。その人たちの生活の内容 そし て ゅ

彼 固 「今夜ははあおまんまがうめえぞ」 い顔に微笑をたたえて、

でいるわけではない 福を感ぜずには 持ち上げるのを見る時なぞは、 と言って、飯茶わんをちょっと押しいただくように目八分に い られない。 のだ。 それにも係わらず、 君は目前の生活を決して悔やん 君はなんと言っても心から幸 君は何かにつ

けてすぐ暗い心になってしまう。 絵がかきたい」

深く大事にかきいだいているのだ。 まえる事なら世の中は簡単なのだ。 君は寝ても起きても祈りのようにこの一つの望みを胸 その 望みをふり捨ててし の 奥

かに幸福だと君は思い入るのだ。彼らにはとにかくそういう それなのに君は絶えず ほんとうに生は死 はる さっ でき まり な り得まいと君自身の心を憐れみ悲しみながらつくづくと思う恋――互いに思い合った恋と言ってもこれほどの執着はあ を思い出している事がある。この山とあの山との 距 りの感じ すような時がある。こういう瞬間に、 間話すら途絶えさして、黙りこんで手先ばかりを忙しく働か にみんなが仕事に夢中になって、 っしょに、配縄の繕いをしたりしていると、どうかした拍子雨の日などに土間にすわりこんで、兄上や妹さんなぞとい 事がある。 休めて、 茫然と夢でも見るように、 君の厚い胸の奥からは深いため息が漏 むつまじくかわしていた世 君の見ておいた山の景色 君は我れにもなく手を る。 はあ

ければならない。しかし君自身の不幸に比べてみると、

その人たちは他人眼にはどうしても不幸な人たちと言わ

よりも不思議だ。

思議ななぞのようなここちを起こさせる。

なぜ生きようとしなければならないのだろう。

これは君に不

見せずに身構えていなければならないような境遇にいながら、

だろう。

なぜ彼らはそんな境遇

死ぬ瞬間まで一分の隙を

運命にあるの

の境の中に生きる事を僥 倖しなければならない

しかし君の周囲にいる人たちがなぜあんな恐ろしい生死

その人たちが生に飽満して暮らすのはそれ

で

い

ぬではない。

ぱりとあきらめをつけて、そういう生活の中に頭からは

少しも疑ってはいない。

生活をする事がそのまま生きる事なのだ。

彼らはきれい

て鋏を持った手の先で、ひとりでに、想像した曲線をひいいに違いない、そんな事を一心に思い込んでしまう。 上に幾度もかいては消し、 またある時は沖に出て配縄をたぐり上げるだいじな忙。 かいては消ししている。 した曲線をひざの

Ď,

生活のために、 ないでいる。 いらいらして、 込んでいる。

君は喜んで君

の両親のために、

君の家

の苦し

は、

界の線をこういう曲線で力強くかきさえすれば、

きっと そし

目前

の生活を疑い、

それに安住する事が

君の父上のかりそめの風邪がなおって、しばらくに、君のがんじょうな力強い肉体と精力とを提供

している。

ら、一家がむつまじくちゃぶ台のまわりを囲んで、暗い五 燭ぶりでいっしょに 漁 に出て、夕方になって家に帰って来てか

の電燈の下で箸を取り上げる時、

父上が珍しく木彫のような

鱗の色に吸いつけられて、思わずぼんやりと手の働きをやめソンレーキを水に薄く溶かしたよりもっと鮮明な光を持ったねながら落ちて行くのをじっと見やっている。そしてクリムびんにせかれるために、針の縁を離れて胴の間にぴちぴちはールびんの間から縄をたぐり込んで、釣りあげられた明鯛が時に、君は板子の上にすわって、二本ならべて立てられたビ

てしまう。

ている。君は子供のように思わず耳もとまで赤面する。ように赤くへし曲げながら、息せき切って配縄をたくし上げは兄上や妹さんが、暗まって行く夕方の光に、なお気ぜわしはきょとんと恥ずかしそうにあたりを見回して見る。ある時ものはない。居眠りしたのを見つけられでもしたように、君これらの場合はっと我れに返った瞬間ほど君を惨めにする

でいったいまれ いしてくれる。そしてどんな苦しみを経ても絵かきになれと いち言うと、絵かきになるためには充分すぎるほどなのだが、 をれだけの才能があるかどうかという事になると判断のしよ それだけの才能があるかどうかという事になると判断のしよ それだけの才能があるかどうかという事になると判断のしよ それだけの才能があるかどうかという事になると判断のしよ でないか。それだのにまだちっぽけな才能に未練を残して、 もなければ、おれの絵を見てくれる人もない。岩内の町での もなければ、おれの絵を見るたびごとに感 たった一人の話し相手のKは、おれの絵を見るたびごとに感 たった一人の話し相手のKは、おれの絵を見るたびごとに感 たった一人の話し相手のKは、おれの絵を見るたびごとに感 たったしくれる人もない。岩内の町での もなければ、おれの絵を見るたびごとに感 いしてくれる。それだのにまだちっぽけな才能に未練を残して、 のしてくれる。それだのにまだちっぽけな才能に未練を残して、 のしてくれる。それだのにまだちっぽけな才能に未練を残して、 いしてくれる。というだらしのない二重生活だ。おれはいったいおれ

る。

兄や妹にも済まない。この一生をどんなふうに過ごしたらお 身の事だ。おれはほんとうに悲しい男だ。親父にも済まない。 きらめている。悲しくもあきらめている。待てよ、 者になれそうな男だけれども、Kは誇張なく自分の運命をあ もしてしまったらしい。おれから見るとKこそは立派な文学 おれは漁夫で一生を終えるのが相当しているらしい。Kもあ のだろう。生まれから言っても、今までの運命から言っても、 はいない。どうすればこの二重生活を突き抜ける事ができる うぬぼれさせられているのではないかという疑いを持たずに を励まし鞭うってくれる。しかしおれはいつでもそのあとに、 がおれ以上にわかるとは思われぬ。Kの言葉はいつでもおれ 勧めてくれる。しかしKは第一おれの友だちだし、第二に絵 れはほんとうにおれらしい生き方ができるのだろう」 の気むずかしい父のもとで調剤師で一生を送る決心を悲 のようなさびしい心持ちになって、こんなことを思いつづけ いうのはほんとうはKの事ではない。そう思っているおれ自 んじょうなあぐらを組みながら、 そこに居ならんだ漁夫たちの間に、どっしりと男らしいが 君は彼らとは全く異邦の人

かった。
指に粘りついた飯粒を落とした。そして配縄の引き上げにか指に粘りついた飯粒を落とした。そして配縄の引き上げにか胴の間に降り積んだ雪を摘まんで、手のひらで擦り合わせて、やがて漁夫たちはそこらを片付けてやおら立ち上がると、

弾力を持った凪ぎ方をして、その上を、霰まじりの粉雪がさー上のほうからたるみなく吹き落として来る風に、海面は妙に一西に、春きだすと日あしはどんどん歩みを早める。おまけに「『サッザ』

目の下二尺もあるような鱈がぴちぴちはねながら引き上げら縄をその一端からたぐり上げ始める。三間四間置きぐらいに、手をまっかにしながら、氷点以下の水でぐっしょりぬれた配っと来ては過ぎ、過ぎては来る。君たちは手袋を脱ぎ去った

れて来る。

間に、岩内の後ろにそびえる山々が、を立て、艪を押して陸地を目がける。 ろげながら見定める。 帰りを待ちわびているのだ。 吹きさらされながら、 慣れた山々の頂をつなぎ合わせて、港のありかをそれとおぼ 線上に現われ出る。 君たちの船は、 海風が凪ぎて陸風に変わらないうちにと帆 船歌をうたいつれながら、 うわさとりどりに 汀 に立って君たちの そこには妻や母や娘らが、寒い浜風に 晴れては曇る雪時雨 高いのから先に、 漁夫たちは見 水 平 の

命は無事だったという底深い喜びがひとりでにわき出して来それを見ると、君と言わず人々の胸の中には、きょうもまずが明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、がいかつく大きく見えだすと、防波堤の突先にある灯台の灯でこれも牛乳のような色の寒い夕靄に包まれた雷電峠の突角

音を立てる――その音がいい。を知らせる旗を揚げる。その旗がばたばたと風にあおられてちの船歌は一段と勇ましくなって、君の父上は船の艫に漁獲て、陸に対する不思議なノスタルジヤが感ぜられる。漁夫た

とに行っては消え、行っては消えするのが見え渡る。っている。白波がかすかな潮の香と音とをたてて、その足もにいくつかの固い群れになって、石ころのようにこちんと立雪のむら消えた砂浜には、けさと同様に女たちがかしこここには、まだ灯火もともさずに黒くさびしく横たわっている。だんだん間近になった岩内の町は、黄色い街灯の灯のほか

む。漁夫たちは吉例のように会社の数取り人に対して何かととまらない早わざで数を数えながら、魚を、畚の中にたたき込く。そしてまだ死に切らない鱈の尾をつかんで、、礫のように漁夫たちと入れ替わって、船の中に、猿のように飛び込んで行漁夫たちは艪や舵や帆の始末を簡単にしてしまうと、「舷横たわって動かなくなる。

ってけんか腰に物を言いつのる。景気にまき込まれて、女たちの或る者まで男といっしょになこのしばらくの間だけは、さすがににぎやかな気分になる。故障を言いたててわめく。一日ひっそりかんとしていた浜も、

荒された砂と、海藻と小魚とが砂まみれになって残っているを見かわし、言葉をかわす暇もなく、浜の上には乱暴に踏み ばかりだ。そして会社の人夫たちはあとをも見ずにまた他 君が君の妹を女たちの群れの中から見つけ出して、忙しく目 分の間でたわいもなく会社の人たちに処分されてしまうのだ。 なげ出さんばかりの険しい一日の労働の結果は、 しか しこの は なば なしいにぎわ い も長い間 では わずか十数 な い。 命を の

ら煙を吐く怪物のような会社の製造所へと運ばれて行く。魚はまたたくうちにさらわれてしまって、墨のように煙突かこうして岩内じゅうの漁夫たちが一生懸命に捕獲して来た

漁船のほうへ走って行く。

ような君たちは口をきくのさえ物惰くてできない。女たの家路に運んで行く。寒気のために五臓まで締めつけら ぶっつり押し ろな出来事 はしゃいだ調子で、その日のうちに陸の上で起こったいろい に幾かたまりの黒い影になって、疲れ切った五体をめい くただ赤くばかり見える初夜になる。 んという快さだろう。 夕焼けもなく日はとっぷりと暮れて、雪は紫に、 |黙ったままで聞きながら歩く。 いろいろな出来事と言っても、 事 は一つもないー 君たちはけさのとおり を話 しかしそれ し立てるの きわだって珍 灯^び は 女たちが がな れた 光な め い

しかし君の家が近くなるにつれて妙に君の心を脅かし始め

い零落の兆候が町全体にどことなく漂っているのだ。

っ骨の強い正直な人たちだったので、すべての激しい運命をればならない。ただ君の家では父上といい、兄上といい、根 性 その銀行が不景気のあおりを食って破産したために、水の泡 も少なくない。 立ち入ってみると、このごろの岩内の町には鼻を酸くしなけ こっていた。軒を並べて住みなしていると、 がったなりにも今日今日を事欠かずに過ごしているのだ。 真正面から受け取って、骨身を惜しまず働いていたから、 ち木のようにがっくりと折れ倒れるのはありがちと言わなけ とおりだ。こらえ性のない人々の寄り集まりなら、 になってしまった。命とかけがえの漁場が、 られていた。汗水が凝り固まってできたような銀行の貯金は、 くつきまつわっているように見えた。君の兄上の初生児も 母上に始まって、君の家族の周囲には妙に死というものが執念な不幸がさせるわざだ。 長わずらいの後に夫に先立った君の な不幸がさせるわざだ。長わずらいの後に夫に先立った君 るものがある。それは近年引き続いて君の家に起こった種々 た。そろそろと地の中に引きこまれて行くような薄気味の といううわさもなく姿を消してしまう家もあった。 れた屋根板が、 の設計のために、 ればならないような事がそこいらじゅうにまくしあがってい れ相当な生計が立てられているようだけれども、 かし君の家を襲ったような運命の圧迫はそこいらじゅうに起 一框が立ち直ったと思うとその家は代が替わったりしてい ある家は目に立って零落 目鼻立ちのそろった年ごろの娘が、 いつまでもそのままで雨の漏 全然役に立たなくなったのは前にも言った していた。 あらしに吹きちぎら どこの家にもそ 間違った防波堤 れるに任せた所 一軒一軒に 身代が朽 嫁入っ 立派に

とか、働き盛りの兄上が死病に取りつかれるとか、「鰊の群来さないまでも類焼の災難にあうとか、持ち船が沈んでしまう れにふさわない暗い灯でそこと知られる柾葺きの君の生まれを家路に運びながら、そしてばかに建物の大きな割合に、そ くし上がるかもしれない――そういう不安は絶えず君たちの た家屋を目の前に見やりながら、 家にとっては、足腰の立たない打撃となるのだ。疲れた五体 に想像されるこれらの不幸の一つだけに出くわしても、 がすっかりはずれるとか、ワク船が流されるとか、いろいろ 心を重苦しく押しつけた。家から火事を出すとか、家から出 人々は暗々裏にそれに脅かされている。いつどんな事がま 君の心は運命に対する疑い 君の

嫂や妹の心づくしを君はすぐ感じてうれしく思いながら、はきちんと片付けてあって、居心よさそうにしつらえてある。 こからどこまでまっ黒にすすけながら、だだっ広い囲炉裏の間を放って水飴のようにやわらかく撓いながら燃えている。 どそれでも敷居をまたぐと土間のすみの 竈 には火が暖かい光 脱いで、竈のあたりに掛けつらねて、ふだん着に着かえる。 さ、一椀の熱湯の味のよさ。 はのぼせ上がるほどぽかぽ れもからからと音を立てるほど凍り果てた仕事着を一枚一枚 石のように音を立てる――をそれぞれの所に始末すると、こ 持って帰った漁具 一日の寒気に凍え切った肉体はすぐ熱を吹き出して、 ――寒さのために凍り果てて、触れ合えば かして来る。 ふだん着の軽い 顔など

親方さんお休み」 小気味のよいほどしたたか夕餉を食った漁夫たちが、

> りつづけている。七時というのにもうその界隈は夜ふけ同様いになる。戸外ではさらさらと音を立てて霰まじりの雪が降 だ。どこの家もしんとして赤子の泣く声が時おり聞こえるば 人が、囲炉裏の火にまっかに顔を照らし合いながらさし向か と挨拶してぞろぞろ出て行ったあとには、水入らずの家族五 寄り集まっているらしい酔狂のさざめきだけがとぎれとぎれ かりだ。ただ遠くの遊郭のほうから、朝寝のできる人たちが

る。やがて兄上と、嫂とが次の部屋に退くと、囲炉裏のそばにした君の父上が、まず囲炉裏のそばに床をとらして横にな わずかな晩。酌に昼間の疲労を存分に発して、目をとろんこ「おらはあ寝まるぞ」

に風に送られて伝わって来る。

のために妙におくれがちになる。

行 く。 には、君と君の妹だけが残るのだ。 時が静かにさびしく、 しかしむつまじくじりじりと過ぎて -28-

言う。 針の手をやめて、 君の妹はおとなしく顔を上げながら君に

「寝ずに」

「先に寝れ、いいから」

に笑みをたたえて妹は君にいたずららしい目を向ける。 いる君は、振り向きもせずに、ぶっきらぼうにそう答える。 「朝げにまた眠いとってこづき起こされべえに」にっと片頬 あぐらの ひざの上にスケッチ帳を広げて、と見こう見して

べえさ。みんなよって笑っとるでねえか、人サの兄さんこと 「なんのでねえよ、そんだもの見こくってなんのたしになる

暇さえあれば見ったくもない絵べえかいて、 なんするだべっ

君は思わず顔をあげる。

て

だれが言っ

⁻だれって……み んな言ってるだよ」

「お前もか」

私は言わねえ」

ねえやつさなんとでも言わせておけばいいだ。これを見たか」 「見たよ。・・・・荘 園の裏から見た所だなあそれは。 「そうだべさ。それならそれでいいでねえか。 わけのわ 山はわし かん

気に入ったども、 雲が黒すぎるでねえか」

「さし出口はおけやい」

寒さは そして君たち二人は顔を見合って溶けるように笑みかわす。 しんしんと背骨まで徹って、 戸外には風の落ちた空を

れる。

黙って雪が降り積んでいるらしい。

今度は君が発意する。

「兄さん先に寝なよ」「おい寝べえ」

お前寝べし・・・・あしたまた一番に起きるだから・・・・ 戸締ま

りはおらがするに

の整頓を一わたり注意し、っかけて土間に降り立ち、 さにこらえ切れなくなってやがて身を起こすと、藁草履をにする。君はなお半時間ほどスケッチに見入っていたが、 二人はわざと意趣に争ってから、妹はとうとう先に寝る事 入り口の戸に錠前をおろし、 竈の火もとを充分に見届け、 漁具 を引

吹きこまぬよう窓のすきまをしっかりと閉じ、そしてまた囲

ては、 の火におぼろに照らされて、君の父上と妹とが炉縁の二方に炉裏座に帰って見ると、ちょろちょろと燃えかすれた根粗朶 というものがこんな厳粛な瞬間にはいちばんたよりなく思わ そう思った。そう思うにつけて、その人たちの行く末につい 待っているのだろう。未来はすべて暗い。そこではどんな事 命が待っているのだろう。この処女の行く末をどんな運命がような不思議な姿を描き出す。この老人の老い先をどんな運 命の力から遠ざかって行く老人と、 でも起こりうる。君は二人の寝顔を見つめながらつくづくと されているとさえ見える妹の寝顔は、 寝くるまっているのが物さびしくながめられる。一日一日生 素直な心で幸あれかしと祈るほかはなかった。人の力 若々しい生命の力に悩ま 明滅する炎の前 幻の

そのままもぐり込みながら、氷のような布団の冷たさがから君はスケッチ帳を枕もとに引きよせて、垢じみた床の中に 必ずいだくなつかしい感情だった。 だの温みで暖まるまで、まじまじと目を見開いて、 つづける。それは君が妹に対して幼少の時から何かの 憐れみとも愛ともつかぬ涙ぐましい心持ちでながめ 君の妹の おりに

それもやがて疲労の夢が押し包む。

寒くさびしくふけて行く。 る富んだ惰け者と、灯台守りと犬ぐらいのものだろう。 今岩内の町に目ざめているものは、 おそらく朝寝坊のでき 夜は

-29-

をもって、 に書き続けて行く。 くのを見守っていてく 意のない事だけは信じてくれるだろう。そして無邪 たっていま 君は か <u>ت</u> 私の唯一の生命である空想が勝手次第に が、 L な てわ っ て く 私 君は私がこうして筆取るそのもくろみ の自分勝手な想像を、 れるだろう。 れ いて来る。 るだろう か。 それがあたってい 私はそれをたよってさら 私 の 想 私 像は が文学者で あ 育っ 気 ع ようが な か て行 微笑 に ら あ あ 悪 る

帯びた青空の いな 思わせる。 綿入れも、雪鞋も、等しく老いる。の上を領していた冬が老いる。—— ぜられるなつかしい季節の 晴れ渡った午後 いていた雲 ちの目に ŧ あ の がら暖 自然の の漁期 て行 た人のみが感ずる、 は、 が、 か もくろみと予言とを人一倍鋭敏に見て取る漁夫 北西の は たのだ。 なんという美妙な美しい色だ。 い 朝夕の空の模様が春めい の堆積に日がさして、またが遠くの地平線高く、 なぞに波打ちぎわに 色 蒸されるようにもやもやとくずれ出 それは北 風 の 晴 び東に回るにつれて、 そう思うと、 ħ 方に住む人の胸にのみ あの過去に対する寛大な思い に 一つだ。 変わって行く。 北風も、 一片の雲のたたずまい 不幸を突き抜けて幸福に この季節になると長 出て見ると、やや緑 まんべ て来た事をまざまざと 幔幕を真一文字に 雪も、 単色に堅く凍りつ んなくばら 冬は 朝から風 しみじみ あ すこま て、 も 出が を感 色を なく < ŧ た 淡 に 地

> ぼ ゆるやかに浜に立つ人の胸に流 ねくれた \dot{o} ように 根性 にさえなり兼 強く辛抱 Ū ね ぬ た いた北人の心に、 北 れこむ。 人の心に、 五か月の長 春 の約束が もう少し い厳冬を でひ ほ

され、 りのけられ、 ども日が高 を織るように ベ ベ は急に景気づいて、 たべたと糊のように指先 朝晩の凍み方はたいしていのと恵み深く響き始める。 られ、旅鳥といっしょに集まって来た漁夫たちが、綾やホック船やワク船をつとのようにおおうていた。蓆が取 くなると、 雪 の解けた砂浜を行き違って目まぐるし 納屋の中からは大釜や締框が、さすがにどこか寒さにひびが して冬と に粘りつく事 変わ IJ は ずは珍 な い しくな ぬ がかつぎ出 れ けれ

慣れ い。 鱈の漁獲がひとまず終わって、を見せ始める。 ある日朝からふいと家を出る。 いだすのだ。 たスケッチ帳と一本の鉛筆とを潜まして。 海に出て働く人 冬の間から一心にねらっていたこの暇 たちはこの もちろんふところの中に 間に 鰊に 少しの間息をつく暇を見の先駆もまだ群来て来な に 君は は

ぱって来た一人の年配な内儀さんは、君を羽に大きな生々しい薪をしこたま積み載せて、 海産物 る。 をゆる に大きな生々しい薪をしこたま積み載せてき水のような色でどぶどぶと漂っている。 その上を雪解け て行ったり来 家を出ると往来には漁夫たちや、女でめん(女労働 め の仲買いといったような人々がにぎやかに浮き浮きし て腰を延ば 小たりし の 水が、 てい ながら、 る。 一冬の塵埃に染まって、泥炭地のわる。根雪が氷のように磐になって、 戱 ħ た調子で大きな声 君を認めると、 馬ば^そり そ の 惠 材木のよう 者 をか 引き綱 や、

「はれ兄さんもう浜さいくだね」

「うんにゃ」

るだんべさ。は、は、は、・・・・。うんすら妬いてこすに、一あれば山さ突っぱしるだから怪体だあてばさ。いい人でもい「浜でねえ?」たらまた山かい。魚を商売にする人が暇さえ

「口はばったい事べ言うと鰊様が群来てはくんねえぞ。おか

しな婆様よなあお前も」

押し手を貸すもんだよ」

「婆様だ!? 人聞きの悪い事べ言わねえもんだ。人様が笑うふとぎ

でねえか」

間ぐんぐん押してやらなければならなかった。 ろがって笑っている。君は当惑して、橇の後ろに回って三四 「そだ。そだ。兄さんいい力だ。浜まで押してくれ 実際この内儀さんの 噪 いだ雑言には往来の人たちがお たらおら もし

お前に惚れこすに」

さんがまただれかに話しかける大声がのびやかに聞こえて来 もしろがって二人の問答を聞いていた群集は思わず一度にど っと笑いくずれる。 君はあきれて橇から離れて逃げるように行く手を急ぐ。 人々のその高笑いの声にまじって、 内 儀 お

「春が来るのだ」

君は何につけても好意に満ちた心持ちでこの人たちを思い

戸が繰りあけられて、札幌のある大きなデパートメント・ス出ると、冬じゅうあき屋になっていた西洋風の二階建ての雨 やがて漁師 :町をつきぬけて、この市街では目ぬきな町 筋 に

> はその店の角を曲がって割合にさびれた横町にそれた。 なかった。「大きな手にはつかまれる」・・・・そう思いながら君 よって捨て値で買い取られる無念さをも思わないではいられ 君はこの大きな臨時の店が、岩内じゅうの小売り商人にどれ そして気のきいた手代が十人近くも、忙しそうに働いている。 ばけばしい色旗が、活動小屋の前のように立てならべてある。 み出た大きな木箱が幾個か店先にほうり出されて、 トアの臨時出店が開かれようとしている。藁屑や新聞紙のは のないために、ほかの土地から投資された海産物製造会社に ほどの打撃であるかを考えながら、自分たちの漁獲が、 広告のけ

が、 かけて、黒い事務マントを羽織った悒鬱そうな小柄な若い男の下の調剤卓の前に、もたれのない抉り抜きの事務椅子に腰ガラス窓から中をのぞいて見る。ずらっとならべた薬種びん れにつづいて小さな調剤所がしつらえてあった。君はそこの は機敏に書物から目をあげてこちらを振りかえる。 すんだガラス板に指先を持って行ってほとほととたたく。K て、君が岩内の いたように座を立って来てガラス障子をあける。 その横町を一町も行かない所に一軒の薬種店があって、そ 一心に小形の書物に読みふけっている。それはKと言っ 町に持っているただ一人の心の友だ。 そして驚 君はく

そして二人は互いに理解するようにほほえみかわす。 君は黙ったまま懐中からスケッチ帳を取り出して見せる。

「君はきょうは出られまい」

いた書生の言葉を使えるのが、 君は東京の遊学時代を記念するために、だいじにとってお この友だちに会う時の一つの

楽しみだった。

「なに、絵はかけずとも山を見ていればそれでいいだ。久ししい。しかし今はまだ寒いだろう。手が自由に動くまい」「だめだ。このごろは漁夫で岩内の人数が急にふえたせいか忙

く出て見ないから

て納まっているより、この薄暗い薬局で、黙りこくって一生ても及びもつかない。いいかげんな芸術家というものになっだ。こうしていてはいけないような気がするよ。だけどもとの書簡集を君の目の前にさし出して見せた)すばらしいもん「僕は今これを読んでいたが(と言ってKはミケランジェロ

った。とがめするもののようにスケッチ帳をふところに納めてしまた。君は励ます言葉も慰める言葉も知らなかった。そして心をう言って君の友は、悒鬱な小柄な顔をひときわ悒鬱にしを送るほうがやはり僕には似合わしいようだ」

「じゃ行って来るよ」

ら離れる。 この言葉を取りかわして、君はその薄よごれたガラス窓か「そうかい。そんなら帰りには寄って話して行きたまえ」

広がって、おりから晴れ気味になった雲間を漏れる日の光が、雪におおわれた野は雷電峠のふもとのほうへ爪先上がりに兵隊長靴はややともするとすぽりすぽりと踏み込んだ。面に近い所が水になってしまった積雪の中に、君の古いこね返したような雪道はだんだんきれいになって行って、地あって、そこから先にはもう家並みは続いていない。溝泥を南へ南へと道を取って行くと、節婦橋という小さな木橋が

のけると、眼界は急にはるばると広がって見える。汗ばんで来た。今までがんじょうにかぶっていた頭巾をはねど強くさして来る。君の顔は見る見る雪焼けがしてまっかにい空気の中に、雪の照り返しがかっかっと顔をほてらせるほ地面の陰ひなたを銀と藍とでくっきりといろどっている。寒

た奔馬が、そろえた前脚を踏み立てて、思わず平頸を高くそこに図らずも陸の果てがあったので、突然水ぎわに走りよっ に忘れてしまう。 山をながめるともう有頂天になった。そして余の事はきれ を直したかのように姿を変える。 ちそうに見えながら、何百万年か何千万年か、昔のままの びやかしたように、 てだんだん高くなりながら、岩内の南方へ走って来ると、そ われている。そして雲が空を動くたびごとに、山は居住まい でそそり立っている。 に天を摩している。今にもすさまじい響きを立ててくずれ落 かれて西南をさす一連の山波が、地平から力強く伸び上がっ なんという広大なおごそかな景色だ。胆振の分水嶺から分 山は急にそそり立って、沸騰せんば そして今はただ一色の白さに雪でおお 君は久しぶりで近々とその かり -32-

相違のあるはずはないのに、全くちがった表情をもって君の的珍しくながめて魅入られたように茫然となってしまう。幾そして目を据えてもう一度雪野の果てにそびえ立つ雷電峠を兵で腰から下まで雪にまみれてたどり着くと、君はそれにまで腰から下まで雪にまみれてたどり着くと、君はそれにに足を踏み入れる。行く手に黒ずんで見える楡の切り株の所君はただいちずにがむしゃらに本道から道のない積雪の中君はただいちずにがむしゃらに本道から道のない積雪の中

えた。 た空を確かとつかんでいるように見えた。その時の山は地面から静々と盛り上がって、 っ た。 ことだった。 自然が君に 種の変屈人のように人々から取り扱われていた君には、 な大きさと豊かさとをもって静 ゃげられるような威圧を感じた。 く執念深く力強いものだった。 筆を運ぶ事もできず、黙ったまま立って見ていたのだったが、 目に映って来る。この前見に来た時は、それは厳冬の一日 ふだん自分の心持ちがだれからも理解され 君はまたさらに目をあげて、 対して求めて来る親しみはしみじみとしたものだ やはりきょうと同じ所に立って、 君はその前に立って押し かに君をかきいだくように見 きょう見る山は なつかしい そ 雪雲に閉ざされ の感じは恐ろし 友に向かうよ 凍える手に もっと素直 ないで、 . こ の ひし

の

君はこの涙ぐましい心持ちを描いてみようとした。 からない。 感情を持ってい がって来た。 るような 温 かい涙ぐましさが、 ちょうど親しい心と心とが出あった時 ある時には君が使っている日本語そのものよりもも 自然の語る言葉は英語よりもはるかに君には 自然は生きている。 の豊かな平明な言葉で自然が君に話 君には同じ人間の 君の そして人間以上に強く 雄 語る言葉だが 々 Ĺ に、 ĺ١ 胸 互 の しょ 中にわ に しか 英語 感 ぜら ける。 き上 は わ か れ わ

い

を計ったりした。

うにしみじみと山の姿をながめやった。

がら、 描かれ始めた。 上には そして懐中からいつものスケッチ帳を取り出し 君は丹念に鉛筆を削 たくま か く荒 れ た手帖と山とをかたみが くれ り上げた。 た君の手に似合わない繊 そして粗末な画学紙 わりに見や て切り 細な線 ij 株 が の な の

> の襞にも君だけば口をそれぞれ綿密 ように調子を取っ びるからは知らず知らず軽い口笛が漏れて、 囲には今はもう生活の苦情もなかった。 と思うごとに、 は、 情だった。 った。子供のような快活な無邪気な一 不幸もなかった。 される貴いなぞが潜めてあった。 ちょうど人の肖像をかこうとする画家が、 たった。日光と雲との明 暗にい実際君の目には山のすべての面 熱愛をもって見きわめようと努める人々にのみ説き明か 小おどりしたい が理解すると思える意味を見いだそうと努め 自分自身に対するおくれがちな疑いもなか て、 観察するように、 紙の上を走ったり、 暗にいろどら ほどの喜びを感じた。 君は一つのなぞを解き得た は、 君は・ 本気な心・・・・ そのまますべての 世間 山の大きさや角度 ħ Ш 田の一つの皺やその人の耳の 君の手は に対する不安も た雪の 君 重 おどる 君の な りに 月鼻 <

ながら、 野のここかしこにむら立つ針葉樹の木立ちや、 手にスケッチ帳を取り上げて目 のために乱れがちな雲 の結果よりは のさえなかった。 い い い刃物で断ち割ったような深い峡間、それなびかしてところどころに立つ惨めな農家、 収穫であれ 満足 そうして幾時間 軽いと言っても、 のため息とともに、 まっ白にそそり立つ峠 軽く かしと祈 ない が過ぎたろう。 やがて一つのスケッチができあが の った。 間 君が船 に 働 を感じ 画学紙の上には、吹き変わ か そ 。 の Ĺ の中で働く の前に据えた時、 姿と、 君 の頂を見せたり隠 ながら、 続けていた手をとめ の前には「時」というも その手前 時の半日 きょうが これらの 薄く炊煙 君は の した 広 仕 分の労働 つ 軽 を地 る風 ر ص j

それらが特種

って生まれ出たと思うとうれしいのだ。力が、哀れな道具立てによってではあるが、とにかく形を取それを見やってほほえましく思う。久しぶりで自分の隠れた感じをもって特種な筆触で描かれている。君はややしばらく

うとする。そして今かき上げた絵を容赦なく山の姿とくらべる人のように、自分の満足の心持ちをきびしく調べてかかろ安にする。君は自分にへつらうものに対して警戒の眼を向け心を充分味わう暇もなく、足もとから押し寄せて来て君を不しかしながら狐疑は待ちかまえていたように、君が満足の

始める。

には見えない。とは、なんの表情も持たない線と面との集まりとより君の目塊的であるのに、君のスケッチ帳に縮め込まれた同じもののは、そのまま寛大と希望とを象徴するような一つの生きたはいわば自然の影絵に過ぎないではないか。向こうに見える自分が満足だと思ったところはどこにあるのだろう。それ

いる。 着の強いものにし、 をまくる。 も五枚も 打ち込んで行く。 君はまたすべての事を忘れ果てて一心不乱に仕事の中に魂を の画帖っ の中に生かし込もうとする、新たな努力が始まると、 そして自分の心持ちをひときわ謙遜な、 スケッチを作った時には、 い 事実を発見すると君は躍起となって次のペ そして君が昼弁当を食う事も忘れて、 粘り強い根気でどうかして山をその もうだいぶ日は そして執 傾 まま 兀 I て ジ

えず美しくよみがえって行く。朝の山には朝の命が、昼の山しかしとてもそこを立ち去る事はできないほど、自然は絶

どは、 て、大きな水の渦に乗った枯れ葉のように、その鷲は静した両の翼を微塵も動かさずに、からだ全体をやや斜めは一羽の大鷲に違いない。目を定めてよく見ると、長くな空高く、小さな黒い点が静かに動いて輪を描いている。 と見える君の目には、この生物はかえって死物 伸びやかに輪を造っている。山が物言わんばかりに生きてる た他 彩にかけても、 の なされる。 きない平明な神秘が宿っている。 夕方に近づくにつれて、 議を現わ には昼の命があった。 てずに粛然とそびえているその姿には、くんでもくんでも尽 命があ の部分は気化した色素のように透明で消えうせそうだ。 山が人に与える生命の感じにくらべれ した。 る。 ましてや平原のところどころに散在する百姓家な Щ 峠のある部分は鋼鉄のように寒くかたく、 の姿は、 日が西に回るとすばらしい魔術 は、その線と陰日向とばかりでなく、タ方の山にはまたしめやかな夕方の やや煙り始めた空気の中に、声も立 目を定めてよく見ると、長く伸ば 見ると山の八合目と覚 ば、 のように のような不思 惨めな幾個 それ 思い かに Ш́

はじめた。
はとも言うべき薄い膜が君と自然との間を隔てった。そして靄とも言うべき薄い度日向を見せて、雲とともに大って来た。落日にいろどられて光を呼吸するように見えた雲って来た。落日にいろどられて光を呼吸するように見えた雲とは真冬からは著しく延びてはいるけれども、もう夕暮れ

かの無機物に過ぎない。

は若い人が恋人を思う時に、その恋が幸福であるにもかかわ君は思わずため息をついた。言い解きがたい暗愁――それ

らず、 凍てた手はふところの中の温みをなつかしく感じた。弁当はッチ帳を閉じて、鉛筆といっしょにそれをふところに納めた。 しくした。 胸の奥に感ぜられるような――が不思議に君を涙ぐま 君は鼻をすすりながら、 ばたんと音を立ててスケ 弁当は

向こうを見ると山から木材や薪炭を積みおろして来た馬橇がら爪先をぬいて一歩一歩本道のほうへ帰って行った。はるか ら爪先をぬいて一歩一歩本道のほうへ帰って行った。けられたようにしびれていた。ようようの事で君は雪 その消え入るような、 響きをたててかすかに聞こえて来る。それは漂浪の人がはる さげた。半日立ち尽くした足は、動かそうとすると電気をか しい境界線をたどっているのだ。そして君は歩きつづける。 君の心はまだ夢ごこちで、芸術の世界と現実の世界との淡々 かに故郷の空を望んだ時のようななつかしい感じを与える。 ちらほらと動いていて、馬の首につけられた鈴の音がさえた 食う気がしないで、 不思議な誘惑の世界から突然現世に帰った人のように、 切り株の上からそのまま取って腰にぶら さびしい、さえた音がことになつかし ようようの事で君は雪の中か

「寒かったろう」

友だちのKと向き合っている。Kは君のスケッチ帳を興奮し

つのまにか君は町に帰って例の調剤所の小さな部屋で、

た目つきでかしこここ見返している。

かなければならない事は有り余るほどあるのだ。

顔つきで、 とKが言う。 君はまだほんとうに自分に帰り切らないような

寒かったからではな 一うむ。・・・・ 寒くはなかった。 んだ」 ・・・・その線の鈍っているのは

> うのはみんな非常に僕の気に入ったよ。 駆けまわるように鉛筆をつかった様子がよく見えるよ。 「鈍っていはしない。君がすっかり何もかも忘れてしまって、 君も少しは満足した

ろう」 にもすまない」 「実際 の Щ の 形にくらべて見たまえ。 僕は親父にも兄貴

と君は急いで言いわけをする。 「なんで?」

しげと見守る。 Kはけげんそうにスケッチ帳から目を上げて君の顔をしげ

交渉・・・・そのほか鰊(漁の始まる前に漁場の持ち主がしておの買い入れ、米塩の運搬、仲買い人との契約、肥料会社との す場所の海底の模様、大釜を据えるべき位置、桟橋の改造、薪炭ていたのに違いないのだ。建網に損じの有る無し、網をおろ を絵に暮らしていた間に、 漁にこそ出ないが、ほんとうを言うと、 して安閑としていい日とてはないのだ。 君の心の中には苦い灰汁のようなものがわき出て来る 漁夫の家には一日と きょうも、君が一日 の だ。 -35-

も、兄妹でも、 びであり悲しみであるのだ。ほかの人たちは 仕事であるのだ。 戯れとよりそれを見ていないのだ。 かすという事は、 いどころか、君にとってはそれは、生活よりもさらに厳粛な 君は自分が絵に 隣近所の人でも しかし自然と抱き合い、自然を絵の上に生 親しむ事を道楽だとは思って 君の住む所では君一人だけが知っている喜 君の考えどおりをその人 ただ不思議な子供じみた ――君の父上で い な い。 い

思いも及ば たちの頭の中にたんのうができるように打ちこむというのは ぬ

その事がらが君自身に関係して来ると、思わず知らず足もと が実生活の上に玉座を占むべきものであるのを疑わない君も、 し実際では決してそうは行かない。 ではなんら恥ずべき事がないと思っている。 芸術の神聖を信じ、 芸術 しか

躊躇もなく実生活を踏みにじっても、 がぐらついて来るのだ。 「おれが芸術家でありうる自信さえできれば、 親しいものを犠牲にし おれ は 刻 の

ても、 を暮らしているのに、 そして恐ろしい。みんなはあれほど心から満足して今日今日 く、僭越な事に考えられる。 ずる事ができなくなってしまうんだ。おれのようなものをか 活の真剣さを見ると、 いていながら彼らに芸術家顔をする事が恐ろしいばかりでな 歩み出す方向に歩み出すのだが・・・・家の者どもの実生 おれだけはまるで陰謀でもたくらんで おれは自分の天才をそうやすやすと信 おれはこんな自分が恨めし い

のだ。 君は思わず 平常のこの考えがKと向かい合っても頭から離れないので、 親父にも兄貴にもすまない」と言ってしまった

すればこの苦しさこのさびしさから救われるのだろう」

いるように始終暗い心をしてい

なければならないのだ。

どう

を芸術の捧誓者たらしめたいと熱望する、 己を滅 君はまた君で、自分はきれいにあきらめながらどこまでも君 Kには 「どうして?」と言ったKも、 した、温かい心の働きをしっくりと感じていたからだ。 物を言われないでも、 君もそのまま黙ってしまった。 君の心はよくわ Kのさびしい、 かってい たし、

> め入る。 のをはばかるように、 君ら二人の目は悒鬱な熱に輝きながら、互いに瞳を合わす やや燃えかすれたストーブの火をなが

も感じながら、 がこみ上げて、 なって来る。 所で堅く組む。 そうやって黙っているうちに君はたまらないほどさびしく 自分を憐れむともKを憐れむとも知れ 女々しさを退けるようにむずかゆい手を腕のKの手を取り上げてなでてみたい衝動を幾度 な い 哀情

が部屋の中をなお悒鬱にして見せる。 こへゃ ゆううつ き届かない電球はごみと手あかとでことさら暗かった。それ 春 き隠れる早さを今さらに君はしみじみと思った。 いて窓から見るともう往来はまっ暗になっている。 ふとすすけた天井からたれ下がった電球が光を放った。 掃除の行 冬の日の

飯だぞ」

父の心と君の心とをうかがうように声のするほうと君のほう すます陰性にしただけで、きぱきぱと盾をつく様子もなく、 悪友でもあるかのごとく思いなして、君が行くとかつてきげ とを等分に見る。 んのいい顔を見せた事のないその父らしい声だった。Kはち ょっと反抗するような顔つきをしたが、 っけんどんに聞こえて来る。ふだんから自分の一人むすこの Kの父の荒々しいかん走った声が店のほうからいかにもつ 陰性なその表情をま

を非常に物足らなく思ったらしく、 座を立とうとした。しかしKはそういう心持ちに君をしたの ょにしろと勧めてやまなかった。 君は長座 をしたの がKの父の気にさわったの 君にもぜひ夕食をいっし だと 推 すると

「じゃ僕は昼の弁当を食わずにここに持ってるからここで食

と君は言わなければならなかった。 おうよ。 遠慮なく済まして来たまえ」

りになると、だんだん暗い心になりまさるばかりだった。 らしかったので、 出して言う事を非常に苦にしていたらしく、 少し顔を晴れ晴れさせて調剤室を立って行った。それも い心持ちで君をかえすのも堪えられないと思いなやんでい Kは夕食を君に勧めながら、ほんとうはそれを両親に打ち 家の貧窮がKの心に染み渡ったしるしだった。君はひと 君の言葉を聞くと活路を見いだしたように 、さればとてまず 思え た

椅子に腰かけたままのひざの上でそれを開いた。腰に結び下げた弁当包みを解いてストーブに寄り添いながら、 かなのにおいをかぐと、君は急に空腹を感じだした。そして それでも夕飯という声を聞き、戸のすきから漏れる焼きざ

「氷の上がすべれだした時はほんとに夢中になるも

のだー

君は自分の遠い過去をのぞき込むようにさびしい心の中に

まみはすっかり奪われていて、 らこぼれ落ちる。 で、飯粒は一 大きな握り飯はすっかり凍ててしまっている。 北海道には竹がないので、 ながら一日寒空に、 粒一粒ぼろぼろに固くなって、持った手の中か 試みに口に持って行ってみると米の持つう てしまっている。春立った時節竹の皮の代わりにへぎで包んだ 切り株の上にさらされ 無味な繊維のかたまりの てい たの

がほろほろとあふれ出た。じっとすわったまま いような寂寥の念がまっ暗に胸中に広がった。 君の目からは突然、 君自身にも思いもかけなかった熱い涙 では いいられ な

な触覚だけが冷たく舌に伝わって来る。

よう

にさげ、 君はそっと座を立った。 スケッチ帳をふところにねじこむと、 そして弁当を元どおりに包ん こそこそと入 で腰

り口に行って長靴をはいた。靴の皮は夕方の寒さに凍って、

鉄板のように堅く冷たかった。

気がついていないらしい。 出店の角近くに来ると、一人の男の子がスケート下駄(下駄せなかった。しばらく歩いて例のデパートメント・ストアの 家々の屋根をおおうていた。 はスケートに夢中になって、 の底にスケートの歯をすげたもの)をはいて、 った道の上をがりがりと音をさせながら走って来た。その子 雪は燐のようなかすかな光を放って、 'さびしいこの横町は人の影も見 君のそばをすりぬけても君には まっ黒に暮れ果てた でこぼこに凍

しさを感じて、君は眉根の所に電光のように起こる痙攣を小見物の前に引き出された見世物小屋の野獣のようないらだた 荷橇の雑音などがぴんぴんと君の頭を針のように刺激する。知らぬものばかりのようだった。そこいらから起こる人声や知らぬものばかりのようだった。 それは君にとっては、 家を照らして、そこには店の者と購買者との影が綾を織った。 もこう思う。何事を見るにつけても君の心は痛んだ。 ってにぎやかだった。電灯も急に明るくなったように両側の デパートメント・ストアのある本通りに出ると打って変わ その場合の君にとっては、 つーつ見

っ た。 なって、 しかし君の家が見えだすと君の足はひとりでにゆるみがち そして君は疑わしそうな目を時々上げて、 君の頭は知らず知らず、 なお低くうなだれてしま 見知り越し

に

な往来を突きぬけて漁師町のほうへ急ぐ。うるさく思いながら、むずかしい顔をしてさっさとにぎやか

-37-

もう静まり返っていた。の顔にでもあいはしないかと気づかった。しかしこの界隈はの顔にでもあいはしないかと気づかった。しかしこの界隈は

7 8

中に流れる線は、もしそこに見守る人がいたならば、思わずまった。そうして立ちすくんだその姿の首から肩、肩から背突然君はこう小さく言って往来のまん中に立ちどまってし

ぞっとして異常な憂愁と力とを感ずるに違いない不思議に強

い表現を持っていた。

がて自分自身をもぎ取るように決然と肩をそびやかして歩きしばらく釘づけにされたように立ちすくんでいた君は、や

行くのだ、その恐ろしい企図とは自殺する事なのだ。

の険しい崕を登りつめた小山の上の平地だった。分に気がついて君自身を見いだした所は海産物製造会社の裏君は自分でもどこをどう歩いたかしらない。やがて君が自

び広がっていた。いろいろな光度といろいろな光彩でちりば その壊れ果てたような荒涼たる地の上高く、 この海のささやきのために鈍く震えている。 から、干潮になった無月の潮騒が、海妖の単調な誘惑の歌のぎらぎらと光っていた。星は語らない。ただはるかな山すそ 光にしたような雲のない空が、 風が落ちたので、凍りついたように寒く沈み切った空気は、 ように、 な傾斜をもって三つならんで、 められた無数の星々の間に、冬の空の誇りなる参宿が、 全く夜になってしまっていた。冬は老いて春は しくなでるように聞こえて来るば 息もつかずに、凝然とし 何かの凶徴のようにひときわ 寒さをかすかな 来な かりだ。 い こて延

君はその平地の上に立ってぼんやりあたりを見回していた。

ように、 そんな誘惑を感ずる事さえやくざな事だと思った。 端に恐れもし、憎みもし、卑しみもした。男と生まれながら、 うに、その企図は心の底から現われ出るのだ。君はそれを極 断を見すまして、泥沼の中からぬるりと頭を出す水の精だ。それはきょうに始まった事ではない。ともすれば君 君の心の中にはさきほどから恐ろしい企図が目ざめていたの ためには、 ったんその企図が頭をもたげたが最後、 もがき苦しみながらも、 すべてを犠牲にしても悔いないような心になって じりじりとそれを成就 君は魅入られた者の しかしい ずる このよ の

消えてしまおうとしているのだ。 深まって行こうとした。重錘をかけて深い井戸に投げ込まれた。その中で君の心だけが張りつめて死のほうへとじりじり 現象がてんでんばらばらに互いの連絡なく散らばってしまっ に、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだった。すべての たたきも、夢の中の出来事のように、君の知覚の遠い遠い末梢される荒廃が君の上下四方に広がっている。 波の音も星のま けている、それがたまらぬほどさびしく恐ろしい事に思い 切って、 感じを強めながら、最後には死と た灯明のように、深みに行くほど、君の心は光を増しながら、 って、固い、冷たい、 君の心は妙にしんと底冷えがしたようにとげとげ 無際限なただ一つの荒廃 君の目に映る外界の姿は突然全く表情を失ってしま 無慈悲な物の積み重なりに過ぎなかっ ――その中に君だけが呼吸を続 いうその冷たい水の表面に しく澄み な

んとうにわからなかった。恐ろしい境界に臨んでいるのだと(君の頭がしびれて行くのか、世界がしびれて行くのか、ほ

のも、寒さの募るのも忘れてしまって、そろそろと山鼻のほのんきな事を考えたりしていた。そして君は夜のふけて行く幾度も自分を、警めながら、君は平気な気持ちでとてつもない

ただ一飛びだ。それで煩悶も疑惑もきれいさっぱり帳消し足の下遠く黒い岩浜が見えて波の遠音が響いて来る。

うへ歩いて行った。

らん」ろう。‥‥頭が先にくだけるかしらん。足が先に折れるかしろう。‥‥頭が先にくだけるかしらん。足が先に折れるかし「家の者たちはほんとうに気が違ってしまったとでも思うだになるのだ。

他人の事でも考えるように、そう心の中でつぶやく。 君はまたたきもせずにぼんやり崖の下をのぞきこみながら、

る。 不思議なしびれはどんどん深まって行く。波の音なども少不思議なしびれはどんどん深まって行く。波の音などもの底を目がけてまろび落ちようとする。あぶら、君の心はただいちずに、眠り足りない人が思わず 瞼 をふしずつかすかになって、耳にはいったりはいらなかったりする。

たからだ。
った。耳をつんざくような鋭い音響が君の神経をわななかし突然君ははね返されたように正気に帰って後ろに飛びすざ

て行きつつあった自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだのように底深い口をあけている。そこに知らず知らず近づいには平地から突然下方に折れ曲がった崖の縁が、地球の傷口ぎょっと驚いて今さらのように大きく目を見張った君の前

君よ。

しかし僕は君のために何をなす事ができようぞ。君

免疫されて、過敏な神経や過量な人為的知見にわずらわされとお会いした時も、君のような人が――全然都会の臭味から

てながら正気になった。

の文代時間になってしまった、立ち続ける力さえ失ってしまらにして、熱い涙がとめどなく流れ始めた。君はただひとりないまでいた。君はそれを感ずると、ひたと底のない寂寥のなに襲われだした。男らしい君の胸をぎゅっと引きしめるよっにもまれたに反響になって、二重にも三重にも聞こえて来た。の上にうずくまってしまった、二重にも三重にも聞こえて来た。の上にうずくまってしまった。山間では、まっにで、君はそれを感ずると、ひたと底のない寂寥のの交代時間になってしまった。二重にも三重にも聞こえて来た。がい音響は目の下の海産物製造会社の汽笛だった。十二時ので、

九

君よ!!

ッチ帳と真率な手紙とを僕に送ってよこしたのだ。 しかし僕はこの上の想像を避けよう。ともかく君はかかる。しかし僕はこの上の想像を避けよう。ともかく君はかかるだ僕のこれまでの想像は一謬っていない事を僕に信ぜしめれた僕のこれまでの想像は一謬っていない事を僕に信ぜしめるだっと同時に僕自身を流す事だ。君の談話や手紙を総合この上君の内部生活を忖度したり揣摩したりするのは僕の

べてをなげうって芸術家になったらいいだろうとは君に勧めけれども僕の喉まで出そうになる言葉をしいておさえて、す――芸術の捧誓者となってくれるのをどれほど望んだろう。をもって自然を端的に見る事のできる君のような土の子がず、強健な意力と、強 靱な感情と、自然に 哺 まれた叡智と

ければならぬ苦しみだ。みであるとは言え、それは君自身の苦しみ、君自身で癒さなで忍ばなければならない煩悶――それは痛ましい陣痛の苦しそれを君に勧めるものは君自身ばかりだ。君がただひとり

なかった。

に圧倒されて、

痩地におとされた雑草の種―そこでは人の生活が、荒

荒くれ

た自然の

威力

のように弱々

しく

地 球

える。 う。 は悩 地球のどのすみっこにも隠されているのだ。 たならばだれもこのすぐれた魂の悩みを知るものは 頭をもたげてい、 それを思うとすべての現象は恐ろしい神秘に包まれ った地球の北端の一つの地 んでいるのだ。 いかなる結果をもたらすかもしれない恐ろしい原因は 人類の活動の中心からは見のがされるほど もし僕がこの小さな記録を公に 角に、 今、 人はおそれ つのすぐ ない しなかっ ħ だろ て見

早く来るのを祈るばかりだ。 君に示され 芸術家として終身働くのが 々しく言うの 君が一人の漁夫として一生をすごすのがい なければならない。 はあ ま りに恐ろしい事だ。 いいのか、 僕はその時が君の上に一 僕は知らない。 それ い の は 神から直 一人の それ 刻も

そして僕は、同時に、この地球の上のそこここに君と同じ

上を知るようになってから僕の心の中にことに激しく強まっ開けよかしと祈るものだ。このせつなる祈りの心は君の身のい疑いと悩みとを持って苦しんでいる人々の上に最上の道が

なった。 じをもって僕を涙ぐませる。 地 球 て感ずる事ができる。 出ようとするものの悩み! 君よ! ほ の生まんとする悩み、 んとうに 今は東京の冬も過ぎて、 の生み出す慈愛の光 地球は生きて それは この地 はわきいで跳り上がる強い力の感――それを僕はしみじみと君によっ い る。 を、 球の 生きて呼 梅が咲き椿 胸 地面は胸を張り広 の中に隠 妼 て が咲くように れ い て生まれ る。 げて

僕はただそう心から祈る。